
とある決闘(デュエル)の超電磁砲(レールガン)

蜻蛉屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デュエル レールガン
とある決闘の超電磁砲

【Nコード】

N 6 1 3 1 T

【作者名】

蜻蛉屋

【あらすじ】

ネオ童実野シティ

究極のエネルギー発生システムにして夢の永久機関『モーメント』によって、急速に発展している街である。

しかし、過去に起きた大災害『ゼロ・リバーズ』によって街の一部は切り離され、シティに人間はそこを『サテライト』と名付け、そこに犯罪者などの社会的地位の低い人間を集め管理するようになった。

た。

これは、そんな階級社会に生きる少女達と、そして『奇妙な痣』を持つ者達、そしてこの世界で最も栄えるカードゲーム『デュエルモンスターズ』によって織りなされる物語である。

キャラ設定を追加しました。

この作品は作者の都合で休載させていただきます；
本当に申し訳ありませんでした！

超電磁砲キャラ設定：7月更新（前書き）

本編に登場する『とある科学の超電磁砲』のキャラクターの設定です。

……実はかなり改造してしまっていて、

原作（超電磁砲）ファンの方の反応が少し怖いです（汗）。

随時更新予定

超電磁砲キャラ設定：7月更新

名前：御坂 美琴

年齢：16

所属：DA分校『トキワダイ』高等部

使用デッキ：『^{オリカ}超電磁界』

エースモンスター：【超電磁界の砲口 レールガン】

設定：

トップス在住。

過去に幾度かの公式大会を優勝し、プロデュエリストとも渡り合ったという経歴を持つDA『トキワダイ』が誇るエリートデュエリストの少女。

しかし彼女自身、その経歴に興味はなく、純粹にデュエルを楽しむ節がある。

街中で強そうなデュエリストを見かけたら勝負を仕掛けずにはいられない。

通称『^{レールガン}超電磁砲』と呼ばれる。

名前：白井 黒子

年齢：15

所属：DA分校『トキワダイ』中等部・ジャッジメント『実戦部隊』

使用デッキ：『?????』

エースモンスター：【?????】

設定：

トップス在住。

数あるDAの分校『トキワダイ』中等部に所属するツインテールが特徴の少女。

固法が受け持つ時期セキュリティ要請部隊『ジャッジメント』の一

員として、彼女のサポートを行っている。

仕事の関係でサテライト出身のクロウ・ホーガンとは顔なじみにな
っており、

何度捕まっても懲りない彼には呆れ気味の様子。

名前：初春 飾利

年齢：15

所属：DA分校『サクガワ校』中等部・ジャツジメント『諜報員』

使用デッキ：『?????』

エースモンスター：【?????】

設定：

シティ在住。

黒子の所属する部隊『ジャツジメント』の諜報員の少女。
頭に造花の花飾りをつけた特徴的な頭をしている。

DAに通うものの、デュエルの腕はそれほどではない。

だがその高い情報解析能力を買われ、『ジャツジメント』に抜擢さ
れた。

デュエルでいつも負けてしまう自分にコンプレックスを抱いており、
『デュエルキング』であるジャック・アトラスには強い憧れを持っ
ている。

仕事の関係上、かなりの情報通でしかもミイハーな面がある。

名前：佐天 涙子

年齢：15

所属：DA分校『サクガワ校』高等部

使用デッキ：『シンクロデッキ』

エースモンスター：【アーカナイト・マジシャン】

設定：

シテイ在住。

長い黒髪が特徴の明るい少女。

親友である初春とはプライベートでも一緒にいることが多く、彼女へのスカートめくりは最早日課で、いつでもどこでも敢行する。DA分校「サクガワ校」でも屈指の実力を持つものの、

ジャックや美琴のような突出した能力があるわけではなく、そのことにコンプレックスを持っている。

そのためか、華のあるデュエリスト（主にジャックや美琴）に対して強烈な憧れと劣等感を持っているが、

「デュエルは楽しく行っ」という美琴の考えに感化されていく。

家庭的な一面もあり、裁縫や料理、家事なども完璧にこなすことができる。

名前：固法 美偉

年齢：22

所属：セキュリティ『デュエルチェイサー』・ジャッジメント責任者
使用デッキ：『ドラゴン族軸・特殊追跡デッキ』

エースモンスター：【F・G・D】

設定：

トップス在住。

短髪でメガネをかけた女性。

セキュリティに所属しており、その中でもDホイラーを追う「デュエルチェイサーズ」である。

また黒子や初春が所属する時期セキュリティ養成部隊「ジャッジメント」の指揮を任されており、責任感も強い。

同じセキュリティに所属する牛尾とは同僚の間柄だが、サテライトの住人を全員クズ扱いする姿勢には反感を持っている。

担当がサテライトのため常習犯であるクロウとは何度も対峙し、時

には逮捕することもあるが、彼の子供たちに対する思いやりに関し
てはある種の共感を持っている。

そのため彼を逮捕した場合、彼のDホイルを子供たちの下に届け、
時にはクロウの代わりに子供たちの世話をすることもある。

オリカ（モンスター）：7月更新（前書き）

本編に登場するオリカ・モンスター編です。

なるべく既存のカードとのパワーバランスを考えながら作っているつもりです（汗）。

随時更新予定

オリカ（モンスター）：7月更新

——超電磁界シリーズ

超電磁界の砲口 レールガン

属性：光

星：7

種族：雷族

種類：シンクロ

攻撃力：2500

守備力：1200

効果：

「超電磁界」と名のついたチューナー+チューナー以外の雷族モンスター1体以上。

このモンスターの特殊召喚に成功したとき、相手フィールド上のカード1枚を破壊する。

1ターンに1度、手札の雷族モンスター1枚を墓地に送ることで、このカードの攻撃力をターンの終了時までそのモンスターの攻撃力の半分アップする。

超電磁界の狩人 ハルベルト

属性：光

星：5

種族：雷族

種類：シンクロ

攻撃力：2100

守備力：1400

効果：

「超電磁界」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体

このカードのシンクロ召喚に成功した時、墓地に存在する雷族モンスター1体を選択しゲームから除外する。

その時、このモンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

フィールドに存在するこのカードが戦闘によつて破壊され墓地へ送られたターンのバトルフェイズ終了時、この効果で除外された雷族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

超電磁界の戦士 ウォルター

属性：光

星：4

種族：雷族

種類：効果

攻撃力：1700

守備力：1000

効果：

このカードの召喚に成功した時、自分の墓地にモンスターカードが存在しない時、デッキからレベル5以下の雷族モンスター1枚を手札に加え、手札からカードを1枚墓地に送る。

超電磁界の妖精 ゲコン

属性：光

星：1

種族：雷族

種類：効果・チューナー

攻撃力：300

守備力：200

効果：

自分フィールドに雷族モンスターがいる状態で、このカードがデッキから手札に加わった時、このカードを特殊召喚する。

自身の効果で特殊召喚されたこのカードは相手プレイヤーにダイレクトアタックすることができる。

超電磁界の天使 イリス

属性：光

星：2

種族：雷族

種類：効果・チューナー

攻撃力：700

守備力：600

効果：

自分フィールド上に「超電磁界」と名のつくモンスターが存在するとき、このカードを墓地から特殊召喚できる。

この効果は自分の墓地に雷族モンスターしか存在しない時のみ発動できず、1度のデュエルに1回しか発動することはできない。

名称：超電磁界の騎兵 リオン

属性：光

星：4

種族：雷族

種類：効果

攻撃力：1200

守備力：1700

効果：

このカードが手札から特殊召喚されたとき、このカードの攻撃力は

2倍になる。

このカードが相手の守備表示モンスターを攻撃する時、このカードの攻撃力が相手の守備力を上回っていれば、その数値だけ相手にダメージを与える。

名称：超電磁界の守人 キーン

属性：光

星：3

種族：雷族

種類：効果

攻撃力：1400

守備力：0

効果：

相手の直接攻撃時、墓地に存在するこのカードを除外することで、このターン受ける戦闘ダメージを700ポイント減少させる。

名称：超電磁界の射手 イーゼル

属性：光

星：3

種族：雷族

種類：効果

攻撃力：500

守備力：1000

効果：

このカードは通常召喚できない。

手札から雷族モンスター1枚を墓地に送ることで、このカードを手札から特殊召喚することができる。

このカードのレベルは捨てたモンスターのレベル分アップする。

——その他のモンスター

ホイル・ドラゴン

属性：風

星：6

種族：ドラゴン族

種類：効果

攻撃力：1600

守備力：1800

効果：

このカードがアドバンス召喚に成功した時、

手札のモンスターを1枚捨て、そのモンスターのレベルの半分を、自分のスピードカウンターとして追加することができる。

この効果が発動したターンのエンドフェイズ時、自分のスピードカウンターを0にし、その数値×500ポイントのダメージを自分ラIFに受ける。

オリカ（魔法&畏）：7月更新（前書き）

本編に登場するオリカ・魔法&畏編です。

スピードスperlについてもこちらに掲載いたします。

オリカ（魔法＆罾）：7月更新

――魔法

――罾

スパーク・ウェーブ・デストロイ -

種類：罾

効果：

自分フィールド上の雷族モンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られたとき、相手フィールド上のモンスター1体を破壊し、手札からレベル4以下の雷族モンスターを特殊召喚する。

スパーク・ウェーブ - ミラージュー -

種類：罾

効果：

自分メインフェイズ時に発動できる。

墓地の雷族モンスター1体を除外し、そのモンスターと同レベルの「ミラージュートークン（攻撃力/守備力 0/0）」1体を自分フィールド上に特殊召喚することができる。

このトークンはリリースすることができず、このカードが発動したターン、自分は通常召喚することができない。

魔女の結界

種類：永続罾

効果：

このカードが表側表示で存在する時、自分フィールド上に表側表示

で存在するモンスターの種族は全て魔法使い族となる。

自分フィールド上の魔法使い族シンクロモンスターがカードの効果で破壊される時、このカードを除外することでその破壊を無効にすることができる。

フォーン・リフト

種類：罫

効果：

自分フィールド上の雷族モンスター1体を手札に戻し、自分の手札から「超電磁界」と名のつくモンスター1体を特殊召喚する。

——Sp

Sp-ドラゴニック・フュージョン

種類：通常

効果：

自分のスピードカウンターが6個以上ある場合に発動できる。

自分フィールド上または、自分墓地から融合召喚に必要なモンスターを除外し、

ドラゴン族融合モンスターを、エクストラデッキから特殊召喚することができる（この召喚は融合召喚として扱われる）。

Sp-フュージョン・エクスプロード

種類：通常

効果：

自分の場のスピードカウンターが4個以上ある時に、自分フィールド上の融合モンスター

1体を選択して発動することができる。

このターン、選択したモンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

S p - フェイク・トラップ

種類：通常

効果：

自分の場のスピードカウンターを5個取り除き、相手の墓地に存在する通常罠カードを1枚選択して発動することができる。

第1話『始まりの決闘 B F v s F・G・D!』（前書き）

この小説を読んでくださる皆さん、ありがとうございます！
蜻蛉屋です。

この小説は、『遊戯王5D・s』と『とある科学の超電磁砲』のクロスオーバー小説であり、
以前に投稿した短編小説『遊戯王5D・sxとある科学の超電磁砲
予告編』の連載バージョンです。

ストーリーの舞台は『遊戯王5D・s』として、
そこに超電磁砲のキャラクターを介入させています。

もちろん遊戯王がメインなので、超電磁砲キャラは超能力は使いません。

代わりにデュエルで戦うようになっております。

物語の都合上、オリカ（オリジナルカード）が多数登場します。
特にあるキャラのデッキはオリカで構成しました（苦笑）。
ですが、なるべくバランスを壊さない程度に頑張ります。

それでは第1話です、どうぞ！

因みに時間軸は、第1部『デュエル・オブ・フォーチュンカップ編』
よりも前となります。

第1話『始まりの決闘 B F v s F・G・D!』

『サテライト』

過去に起きた大災害”ゼロリバース”によってネオ童実野シティから分断された土地に名付けられた名前である。

ここでは身分の低い者・犯罪者がそこに集められて生活している。サテライトの住人は、シティの住人が出すゴミを再生して再使用できるようにすることで、その生活費を稼いでいるのが一般的である。しかし元より治安が安定しておらず犯罪は後を絶たない。

「こいつを捕えろ!」

そんなサテライトの保管所から逃亡する影が1つ。

その影は特殊な形のバイク”D・ホイール”に乗り、一瞬でネオ童実野シティ警察組織”セキュリティ”の包囲網を突破していった。

中には自分たちのD・ホイールで追跡を開始するが、

「へっ、そんなもんで俺の”ブラック・バード”に追いつけるかよ!」

D・ホイールの出力の違いか、追跡するセキュリティのD・ホイールとの差はみるみる広がっていく。

現場から少し離れた場所で、1台のトレーラーが止められていた。

そのトレーラーの中には、15歳ほどの少女2人と20代の女性が1人、その現場の状況を監視するモニターを睨んでいた。

「付近のエリアで窃盗事件発生！犯人はD・ホイールに乗って逃走を開始。現地のセキュリティが追跡していますが、逃げられるのも時間の問題かと……。」

3人のうちの1人、頭に花飾りをつけた少女がモニター越しに現場の状況を報告する。

「場所はどこですか？」

少女の報告を聞くと、隣に座っていたツインテールの少女が口を開く。

「エリアE、15番地近くを逃走中です！」

モニターのコンソールを叩き、そこから出てきた情報を読み上げる。

「この近くね？」

言って端に座っていた短い髪の女性が立ち上がり、机に置いてあったヘルメットを被る。

「はい、あと30秒後に我々の前方を通りすぎます。」

「じゃあ私たちもすぐに出るわ！白井さん。」

「了解ですの！」

白井と呼ばれたツインテールの少女も、机に置いてあったヘルメットを被り、その部屋を出て行った。

「初春さん、後をお願いね！」

「はい！」

と、初春と呼ばれた花の髪飾りをつけた少女も敬礼した。

――

「へ、楽勝だぜ！」

セキュリティの追跡を退けたD・ホイラーは、ある場所を目指してD・ホイラーの速度を上げようとする、が、

「スピード・ワールド、強制発動！」

「なに！？」

『デュエルモードオン、オートパイロット・スタンバイ』

突如彼のD・ホイラーから電子音が聞こえたかと思うと、D・ホイラーの一部が変形し、周囲が不思議な空間に包まれた。

「誰だ！」

突然の状況にD・ホイラーは焦って背後を見ると、

「これであたのD・ホイラーは速度を上げることはできない。」

そこには1人のセキュリティの姿があった。

「伏兵が潜んでやがったか……！」

その姿を確認してD・ホイーラーは悪態をつく。

スピード・ワールドが発動されれば、そのデュエルが終わらなければ解除することはできない。

「なら、このデュエルに勝てばいいだけだろ！」

「その通りよ！」

デュエルを制する者がその場を制することができる。

それがこの世界のルールでもある。

それを2人はよく理解していた。

だからこそ決闘^{デュエル}が起きる。

「デュエル！」

セキュリティ

ライフポイント

LP：4000

D・ホイーラー

LP：4000

2人は同時にそう叫ぶと、お互いに左腕にセットされたデッキから5枚カードを引く（ドローする）。

「まずは私の先攻よ！ドロー！」

セキュリティはデッキからカードを1枚ドローする。

「私は手札から【ゴーレム・ドラゴン】を守備表示で召喚！」

そして手札からカード1枚をD・ホイールに設置されている装置にセットすると、目の前にソリッドビジョン化した岩石の竜が現れ、その場で守りの体制をとった。

ゴーレム・ドラゴン

属性：地

レベル：4

守備力：2000

「更にカードを1枚セットしてターンエンド！」

セキュリティ

LP：4000

フィールド：

ゴーレム・ドラゴン

伏せカード：1枚

手札：4枚

「へ、俺のターン！」

セキュリティがターンエンドを宣言したのを確認し、次はD・ホイラーがデッキからカードをドローする。

すると2人のモニターに表示された12固あるカウンターのうち1個目が点灯する。

セキュリティ
スピードカウンター

SC：0 1

D・ホイラー

SC：0 1

「俺は手札から【BF - 暁のシロツコ】を召喚！」
ブラックフェザー

D・ホイラーがカードをセットすると、目の前に黒い羽根を纏った人型のモンスターが出現した。

BF - 暁のシロツコ

属性：闇

レベル：5

攻撃力：2000

「このカードは自分の場にモンスターが存在せず、相手の場にのみモンスターが存在する場合のみ、手札からリリース無しで召喚できる！」

本来、レベル5以上のモンスターを召喚する際、自分のフィールド上のモンスターを特定の数を墓地に送った（リリースした）場合のみ召喚することができる。

しかし中には特定の条件が揃った場合に召喚できるモンスターも存在する。

その中の1枚が【BF - 暁のシロツコ】なのである。

「さらに、自分の場に”BF”と名のついたモンスターが存在する場合、手札からこのカード達を特殊召喚できる、現れる！【BF - 疾風のゲイル】、【BF - 黒槍のブラスト】！」

そして更に2体のモンスターが姿を現す。

BF - 疾風のゲイル

属性：闇

レベル：3 チューナー

攻撃力：1300

BF - 黒槍のブラスト

属性：闇

レベル：4

攻撃力：1700

「【疾風のゲイル】の効果発動！相手フィールド上のモンスターの攻撃力と守備力を半分にする！」

彼の宣言と共に体格の小さい【ゲイル】の翼から発せられた真空波が、ゴーレム・ドラゴンを襲う。

ゴーレム・ドラゴンは真空波に切り裂かれ、その身体がボロボロになってしまった。

ゴーレム・ドラゴン

守備力：2000 1000

しかしD・ホイラーの攻撃はまだ終わらない。

「【暁のシロッコ】の効果発動！このカードとゲイルの攻撃力を【黒槍のブラスト】に集める！」

BF・黒槍のブラスト

攻撃力：1700+1300+2000=5000

「更に【黒槍のブラスト】は相手守備モンスターを攻撃する時、その攻撃力が相手の守備力を上回っていた場合、その数値分の貫通ダメージを与える！」

セキュリティの場を守るモンスターの守備力は1000、この攻撃が通れば4000もの貫通ダメージを受け、そのLPは0。

つまり敗北である。

「じゃあ後はその伏せカードだ！手札から罾カード^{トラップ}発動【デルタ・クロウ・アンチリバーズ】！」

「手札から罾カード！？」

そのカードにセキュリティも驚く。

本来『罾カード』は一度自分の場に伏せ（セット）、次のターンに発動が可能になる。

「このカードは自分の場に”BF”と名のついたモンスターが3体いる時、手札から発動することができる！てめえのフィールド上に伏せられた魔法・罾カードを全て破壊させてもらうぜ！」

発動されたカードから光が発生し、セキュリティの場にセットされたカードを襲う。

その瞬間、D・ホイーラーは勝利を確信した。

しかし、

「その瞬間、リバーiscardオープン！【和睦の使者】」

「なに！？」

「このカードの発動により、私はこのターンあなたから戦闘ダメージは受けず、戦闘で【ゴーレム・ドラゴン】を破壊されることはないわ！」

言ってセキュリティは相手D・ホイラーとD・ホイールを並べる。

「残念ね、クロウ君。これであなた『お得意』の1ターンキルは防いだわよ。」

「デメエ、固法か!？」

自分に話しかけるセキュリティの声を聞いて、クロウと呼ばれたD・ホイラーは驚愕した。

「当たり前。」

固法と呼ばれた女性はヘルメット越しに笑う。

「わたくしの上司を気安く呼ぶな、ですわ!」

「白井、お前もかよ……。」

固法の後ろにしがみつく形で乗る少女の存在にも気付き、クロウは呆れ気味に呟いた。

「さ、どうするの?」

「^{サレンダー}降参なら今のうちですわよ?」

このターンでの決着を避けられたクロウに、2人で煽りをかける。

「けっ、誰がサレンダーするか!だったらこれだ!」

それに動じることもなく、クロウは自分の場の【ゲイル】と【ブラ

スト」に指示を出す。

すると2体は同時に頷いて空高く飛びあがった。

「レベル4【黒槍のブラスト】にレベル3【疾風のゲイル】をチュ
ーニング！」

その言葉とともにゲイルの身体が光に包まれ、大きな3つの輪となり、その輪にブラストが飛び込む。

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！」

輪に包まれたブラストの身体から4つの小さな光が現れ、やがてそれらが1つの大きな光となった。

レベル：3 + 4 = 7

「シンクロ召喚！【BF・アーマード・ウィング】！」

BF・アーマード・ウィング

属性：闇

レベル：7 シンクロ

攻撃力：2500

光の中から、鎧のような黒き翼を纏ったモンスターが1体姿を現した。

「来たわね、【アーマード・ウィング】……。」

その姿に固法も表情を引き締める。

「俺はさらに1枚のカードを伏せてターンエンド!」

クロウ

LP:4000

SC:1

フィールド:

【BF - 暁のシロッコ】

【BF - アーマード・ウィング】

伏せカード:1枚

手札:1枚

「さあ、どこからでもかかってきやがれ!」

「私のターン!」

固法のターンとなり、デッキからカードを1枚ドローする。

固法

SC:1 2

クロウ:

SC:1 2

（彼のことから、必ず伏せカードは罠カード。）

固法はその立場上、クロウとは何度もデュエルをしている。

そのため、固法はクロウの性格をよく知っていた。

「私は手札から【Sp・エンジェル・バトン】を発動！私の場にスピードカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドローし、手札を1枚墓地に送るわ。」

「ここで手札交換か……。」「

「あら、まだあるわよ。【Sp・エンジェル・バトン】発動！」

「くそ、またかよ！」

固法はさらにデッキから2枚カードをドローし、1手札を墓地へ送る。

そして固法は新たな動きを見せる。

「私は場の【ゴーレム・ドラゴン】をリリースし、手札から【ホイール・ドラゴン】をアドバンス召喚！」

彼女の場の【ゴーレム・ドラゴン】が虹色の光に包まれ、その中からタイヤを持ったドラゴンが現れた。

ホイール・ドラゴン

属性：風

レベル：5

攻撃力：1600

「初めて見るモンスターだな……。」

連続で【Sp】を使われたことと、初めてみるモンスターに警戒するものの、

「けどよ、そんなモンスターで俺の『BF』達を倒せるかよ！」

戦闘破壊されず、ダメージを受けない【アーマード・ウィング】の存在もあり、クロウはまだ余裕を見せる。

だが、

「【ホイール・ドラゴン】のモンスター効果発動！このモンスターのアドバンス召喚に成功した時、手札のモンスターを1枚捨てることで、そのモンスターのレベルの半分を私の場のスピードカウンターに追加することができる！」

「なんだそりゃ！？」

【ホイール・ドラゴン】の効果に驚愕するクロウを無視し、固法は手札からカードを1枚引き抜き、それをクロウに見せる。

「私はレベル8の【タイラント・ドラゴン】を捨て、その半分の数値をスピードカウンターに加える。」

固法

SC: 2 6

「スピードカウンターを一気に6だと……。」

【Sp】と名のつくカードは、その発動条件には必ずスピードカウンターが必要である。

そのスピードカウンターの数を一気に引き上げる【ホイール・ドラゴン】の効果は脅威と言えた。

「ただしこの効果を発動したターンのエンドフェイズ時に、私は場のスピードカウンターの数×500ポイントのダメージを受け、スピードカウンターは0になってしまう。」

つまり【ホイール・ドラゴン】の効果は諸刃の刃なのである。

「でもこれで、私はこのカード達を使うことができる。」

しかし固法はそのリスクを恐れておらず、一気に勝負を決めにかかった。

「手札から【Sp・ドラゴニック・フュージョン】を発動！自分のスピードカウンターが6個以上ある時、自分フィールド上または、自分墓地のモンスターを使って融合召喚を行うことができる！」

「来たな！」

それはクロウも想定していたらしく、警戒心を強める。

「フィールド上の【ホイール・ドラゴン】と墓地のドラゴン族4体をゲームから除外し……。」

上空に現れた渦の中に、【ホイール・ドラゴン】と先ほど墓地へ送られた【ゴレム・ドラゴン】、そしてカードの効果によって捨てられたドラゴン族のモンスターが吸い込まれていく。

「来なさい！ フアイア・ゴレム・ドラゴン 【F・G・D】！」

F・G・D

属性：闇

レベル：12

攻撃力：5000

先ほどの渦の中から、5つの異なる首を持った巨大な竜が姿を現した。

「相変わらずでけえな！」

その強大な姿にクロウは一瞬怯むが、

「でもよ、俺の【アーマード・ウィング】の効果は戦闘では破壊されず、俺は戦闘によるダメージを受けねえ！」

クロウのエースモンスター【アーマード・ウィング】にはどんな攻撃も通さない、戦闘破壊耐性が備わっている。

「そうね、あなたの【アーマード・ウイング】を破壊することではできないわ。……でも、もう1体あなたにはモンスターがいるわよね？」

固法がクロウの場にいるもう1体のモンスターを指さす。

それは最初のターンに召喚された攻撃表示状態の【暁のシロツコ】だった。

「げっ！」

クロウはそこで自分のミスに気づく。

【暁のシロツコ】は攻撃力2000の上級モンスター。

しかし固法の場に存在する【F・G・D】の攻撃力は5000、とても太刀打ちできる能力ではない。

「さらに私は手札から【Sp・フュージョン・エクスプロード】を発動！」

さらに固法は攻めの手を緩めない。

「スピードカウンターが5つ以上ある時に発動できる！このターン、自分フィールド上の融合モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与えることができる！」

「くそ！」

追い詰められつつある状況にクロウは表面上焦りの色を露わにするものの、

（……だが、まだ俺の場には【聖なるバリア・ミラーフォース】がある。攻撃が来ても手はまだある。）

相手の攻撃宣言時、相手の攻撃表示モンスターを全て破壊するトラップカード【聖なるバリア・ミラーフォース】。

それによる固法の自滅をクロウは狙っていた。

「クロウ君、あなたの罠カードを使わせてもらっわね。」

しかしそんなクロウの内心を読むかの如く、固法は笑う。

「はっ？」

「【Sp・フェイク・トラップ】発動！私は場のスピードカウンタ―を5個取り除き、あなたの墓地の【デルタ・クロウ・アンチリバーズ】の効果を発動！」

固法

SC：6 1

「し、しまったあっ！」

彼女の間から光が放たれ、それに反応したクロウの墓地にある【デルタ・クロウ・アンチリバーズ】が場に現れる。

そのカードから光が放たれ、クロウの場の【聖なるバリア・ミラーフォース】を破壊した。

「これであなたの場合はガラ空きね。クロウ君、覚悟はできてるかしら？」

「いい……。」

微笑む固法に、為す術が無くなったクロウの表情が引きつる。

「【F・G・D】、【暁のシロツコ】を攻撃！『フィフス・エレメンタル・ブレイズ』！」

固法の攻撃宣言と同時に【F・G・D】の5つの首からそれぞれ炎・水・風・地・闇のブレスを放ち、【暁のシロツコ】を吹き飛ばした。

「のあああああ！！」

クロウ

LP：4000 1000

「そして【Sp・フュージョン・エクспロード】の効果ダメージも受けなさい！」

さらに【F・G・D】の身体から閃光が放たれ、クロウを襲つ。

「ぐあああああ！！」

クロウ

LP:10000

クロウのD・ホイールが『LP:0』を表示した瞬間、画面に『DEFEAT』の文字が現れ、彼のD・ホイールはその場で急停止した。

そんな彼の近くに固法はD・ホイールを止める。

「はい、今回は私の勝ちね。」

「ちくしょう……。」

「『ジャッジメント』ですの！クロウ・ホーガン、あなたを窃盗の現行犯で逮捕しますわ。」

D・ホイールを降りた白井が持っていた手錠をクロウの手にはめる。

「次はどこに『マーカー』が付けられるのかしら？」

固法はため息交じりに尋ねる。

マーカーとは犯罪を犯した者につけられるIDで、昔の『烙印』に近いものである。

本来これをつけられることは恥とされているが、

「左だけじゃちょっとバランス悪かったからな……、次は同じ奴を右にもつけてもらうか。」

と、何の気なしにクロウは答えるのだった。

「相変わらずですわね……。」「

そんな彼に黒子も呆れ口調だ。

「おい固法、今回は負けたがな、次は絶対に俺が勝つからな！」

逮捕されてなお威勢よく吠えるクロウに対し、

「普通のデュエルなら歓迎だけど、こういった場面でのデュエルは
ご遠慮願いたいわよ？」

固法は苦笑気味に答えるのだった。

――

クロウをセキュリティ本隊に引き渡した後、白井と固法と初春はその場で休憩をとっていた。

「白井さんも初春さんも悪かったわね、こんな時間に連れ出しちゃ
ったりして。」「

ヘルメットを脱いだ固法が2人を労う。

既に空は白ずみ始めていた。

「いいえ、わたくし達は『ジャッジメント』ですの。」「

「はい、今回も固法さんカッコよかったです！」

しかし白井も初春も特に不満な様子はなく、純粹に事件解決の達成感に浸っていた。

そんな2人に固法も笑顔で「ありがと」と答えると、先ほどまでクロウが乗っていたD・ホイールを見た。

「後はこれを”あの子たち”に返しに行くだけね……。」

そう言つて固法はクロウのD・ホイールに乗り込む。

「毎度毎度、固法さんも大変ですわね……。」

そんな彼女を見守りながら、白井は大きくため息をつく。

「まあ、これが彼との約束でもあるからね。」

そんな白井の言葉に固法も苦笑する。

「そういえばあなた達、明後日にD・Aで実技試験があるでしょう？
私は少しの間帰れないから、ちゃんと他の人に送ってもらふのよ。」

「了解ですの。」

「はい、わかりました。」

2人の返事に満足したのか、固法は再度ヘルメットを被ると、そのままサテライトの地をD・ホイールで滑走していった。

「あゝあ、明後日のテスト、少し気が重いです。」

固法を見送った後、初春は肩を落とす。

「負けるからですか？」

そんな彼女を見て、白井は意地悪い笑みを浮かべる。

それが図星だったからか、初春は少し顔を赤くしながら、

「なんでそんなことを言うんですか！わ、私だって『ジャッジメント』ですよ？そんな負けるわけ……。」「

と強がってみせるが、

「前回の実技試験……。」「

「はう！」「

その言葉にへなへなと膝をついた。

「……白井さんはまだいいですよ、デュエルは強いし、近くには”あの人”がいるし。」

「あの人？ああ、”お姉様”のこと……っ！」「

白井が”お姉様”なる人物の名を挙げた瞬間、まるで雷に打たれたかのように硬直した。

「どうしたんですか？白井さん。」「

その様子に初春は怪訝そうに尋ねる。

「初春、こうしちゃおれませんわ！明後日の試験、高等部との合同でしたの！つまりお姉さまにもわたくしのデュエルを見られますの！」

「ええ、そうなんですか！？」

白井の言葉に初春は目を輝かせる。

「早く戻って、デッキの調整をしておかないと……。お姉さまの前で無様な試合を見せるわけには参りませんわ！」

「白井さん、落ち着いてください！」

焦りだす白井、それを宥める初春、そんな2人の前にサイドカーを搭載したセキュリティのD・ホイールが止まった。

「なんだ、今回の事件解決の立役者に会えるかと思えば、俺の仕事はガキ共のお守かよ。」

そう言つてD・ホイールから降りたのは、屈強そうな体格の男だった。

「あら牛尾さん、残念ながら固法さんは既に別の任務に向かわれましたわよ。」

牛尾と呼ばれた男を目にした瞬間、白井のテンションはすぐに下がり、敵意むき出しのまま彼の問いに答えた。

そんな彼女の態度に牛尾はフン、と鼻を鳴らし、

「まあ、たかが”サテライトのクズ”を1人捕まえただけでやるこ
とが大仰すぎんだよ。こんなガキまで現場に連れてきやがって……。

」

そして今はいない固法に対して悪態をついた。

それには白井や初春も不満そうな表情になる。

「お言葉ですが牛尾さん、わたくし達は……。」

「知ってるよ、次期セキュリティ養成部隊『ジャッジメント』だろ
?。」

『ジャッジメント』

次期セキュリティ養成部隊の名称であり、主に能力ある未成年の学
生を新しいセキュリティへと養成するための機関である。

そこでは実戦での空気に触れさせるために、実際の事件に立ち会わ
せ、時には他のセキュリティと協力体制をとることで事件解決する
こともある。

セキュリティ『デュエルチェイサーズ』として功績を残している固
法は、ジャッジメント設立初期からその指揮を任されており、黒子
達直属の上司に当たるのである。

「そうですよ、だからわたくし達のことには口出し無用ですわ。無

論、固法さんのことについても……。」

「け、そうですね。」

黒子の指摘を聞き流すように適当な返事をする牛尾。

彼にとって、自分よりも若いくせに多くの功績を残す固法の存在は鬱陶しく、

思想の違いもあり、職場内ではほぼ対立する立場にあった。

「……それと。」

次は初春が話に割り込んでくる。

「「サテライトの人達は」クズ」なんかじゃありません！」だろ？
聞き飽きたよ、そんな綺麗ごと。」

しかし牛尾は初春の言葉をスルーしてD・ホイールに乗り込んだ。

「おら、さっさと乗れつつの。置いてくぞ！」

その言葉にこれ以上の口論は無意味と判断し、2人は牛尾のD・ホイールのサイドカーに乗り込んだ。

サテライトで事件が発生する少し前、夜のネオ童実野シティ。

サテライトとは違い、最先端の建物やビルが並ぶ町。

「なあ姉ちゃん、こんな時間にどこ行くんだよ？」

そこでもやはり、サテライトのように素行の悪い人間は存在する。

数人の男たちに囲まれた短髪の少女が1人。

少女は男達に怯えるわけでも凄むわけでもなく、まるで男達の存在に気付いてないかのように自分のデッキの編集に集中している。

「その格好、君D Aの生徒？」

「俺達、この辺じゃかなり腕が立つんだぜ？」

「あんな学校に行くより、俺達といた方が面白いぜ？」

「もっと面白いことも見つかるかもな。」

そう言つて男達は口々に下品な笑いを上げる。

しかしその状況下でも、少女は無反応を通していた。

「おい、俺達の話聞いてんのか！？」

そんな彼女の反応に業を煮やした1人が少女の肩を掴もうとする、
が。

「ねえ。」

突如少女が初めて男達に目を向けた。

その眼光は、まるで獲物を狩る獣のように鋭く、男達は一瞬気圧される。

「あんた達、本当にデュエル強いの？」

恐れも諦めもない、むしろ期待を持つような声色で少女は男達に尋ねた。

「あ、ああ、このエリアは俺達の縄張りだ。」

「じゃあ強いのね？」

再度少女は確認すると、手持ちのバッグから大型の装置『デュエル・ディスク』を取り出し、それを左腕に装着する。

「あんた達、私とデュエルしなさい。私に勝ったら、私をあんた達の好きにさせてやるわ。」

そして、不敵の笑みを浮かべてそれを構えたのだった。

第1話『始まりの決闘 B F v s F・G・D!』（後書き）

とりあえず……、

クロウファンの方、本当に申し訳ありません！

さて、本編では早速デュエル描写に挑戦しました。
なるべく見やすいように工夫はしてみたのですが、

何かご指摘などがございましたら、是非よろしくお願いいたします。

今後かなり自由に書いていきますが、楽しんでいただけたらと思います！

それでは！

次はやっとこの物語の主人公が登場です。

オリカのこと：

最初はあとがきに書こうと思ったのですが、

かなり膨大な文字数になってしまっているので、オリカ紹介専用の章を設けました。

随時更新はかけていきますので、興味がおありでしたら是非。

第2話『超電磁砲（レールガン）』（前書き）

この小説を読んでくださっている方へ、

この小説をお気に入り登録してくださっている方へ、

この小説の感想・評価をしてくださった方へ、

本当にありがとうございます！

蜻蛉屋です！

第2話の執筆が完了しましたので、投稿します。

今回はこの物語の主人公が登場です！

ご指摘を受けた箇所があったので、デュエルの内容を修正いたしました。

第2話『超電磁砲（レールガン）』

―夜の童実野シティ

月の光も入らない路地裏で、少女と男がデュエル・ディスクを構えて対峙している。

「デュエル!!」

少女

LP：4000

男性

LP：4000

「まずは俺のターンだ!」

2人は同時にデッキから5枚カードをドローすると、まずは男がカードを1枚ドローする。

「やっちまえ、右相さん!」

彼はどうやら男達のリーダー格らしく、そこにいる全員が右相に対して声援を送っていた。

「俺は手札から【デーモン・ソルジャー】を召喚!」

デーモン・ソルジャー

属性：闇

レベル：4

攻撃力：1900

右相の場にマントを纏った悪魔が現れ、その腰に差してあった剣を抜く。

「さらにカードを1枚伏せてターンエンド!」

右相

LP：4000

フィールド：

【デーモン・ソルジャー】

伏せカード：1枚

手札：4枚

「そんなガキなんてさっさと潰せえ!」

「おらガキ、テメエの番だぞ!」

右相がターンを終了してすぐにギャラリーの歓声は罵声に変わり、少女を攻め立てようとする。

しかし、

「私のターン。」

慣れているのか、少女はその罵声を全く気にも介さずデッキからカードをドローする。

「私は手札から【超電磁界の戦士 ウォルター】を召喚！」

超電磁界の戦士 ウォルター

属性：光

レベル：4

攻撃力：1700

少女の場に雷を象ったような鎧の戦士が現れた。

すると観客となった男達は一斉に笑いだした。

「？」

少女は何事かと周囲を見回す。

「嬢ちゃん、お前デュエル初めてか？」

そんな少女に右相は気の毒そうに声をかけた。

「……………」

少女はなにも答えずに右相を見る。

「こいつらが笑う理由は簡単だ。俺の【デーモン・ソルジャー】は攻撃力が1900！お前のモンスターは攻撃力が1700！算数が

できれば簡単だろ?」

「あんたのモンスターの方が攻撃力は上、でしょ?」

少女の返答に右相も満足そうにうなずく。

「そうそう、今なら守備表示に直させてやってもいいぜ?」

彼がそういうと周囲の観客の笑い声が一層大きくなる。

「まあ無駄だがな! 畏発動! 【最終突撃命令】このカードがある限り、お前は守備を選択できない!」

つまりこのカードがある限り、少女はモンスターを守備表示にすることができないことになる。

「さあ、どうする? このままターンエンドか?」

右相は得意げに少女を煽るが、少女は彼の予想しえないことを言った。

「ターンエンドもなにも、私は今こいつの効果を発動させてんだけど。」

「は?」

「【ウォルター】の効果発動! このカードの召喚に成功した時、自分の墓地にカードが存在しない場合、デッキからレベル5以下の雷族モンスター1枚を手札に加え、その後手札からカードを1枚墓地に送る。」

言って少女はデッキからカードを1枚抜きだすと、

「話すのは勝手だけど、ちゃんと相手を見ておいた方がいいわよ。」

右相を忠告しながら手札を1枚墓地に送った。

「なっ！」

プライドを傷つけられたのか右相は顔を真っ赤にする。

「手札に加えた『超電磁界の妖精 ゲコン』の効果発動！自分フィールドに雷族モンスターがいる状態で、このカードがデッキから手札に加わった時、このカードを特殊召喚する。」

そう言って先ほど手札に加えたモンスターをデュエルディスクにセツトした。

超電磁界の妖精 ゲコン

属性：光

レベル：1 チューナー

攻撃力：300

するとウォルターの隣に雷を纏ったカエルのマスコットのようなモンスターが姿を現した。

その姿は他に比べて明らかに弱々しいものだったが、

「チューナーモンスター!？」

右相は即座にそのモンスターの正体に気付いた。

そこで少女はニヤリと笑う。

「レベル4のウォルターにレベル1のゲコンをチューニング!」

彼女の掛け声と共に、2体のモンスターが宙に舞う。

そしてゲコンが身体を精いっぱい膨らまして1つの輪になると、そこにウォルターが入り込んで4つの星となる。

「紡がれし力が、我が敵を狩る狩人が解き放つ!」

やがて4つの星と1つの輪は大きな1本の光となる。

レベル：1 + 4 = 5

「シンクロ召喚! 攻め落としなさい、【超電磁界の狩人 ハルベルト】」

超電磁界の狩人 ハルベルト

属性：光

レベル：5 シンクロ

攻撃力：2100

そして光の中から【ウォルター】と同じ模様の軽い鎧を身に纏った戦士が現れた。

その手には大きな弓を持っている。

「シンクロ召喚……だと!？」

この光景には右相どころか、今まで野次を飛ばしていた観客すらも言葉を失った。

「ハルベルトの効果発動!このカードのシンクロ召喚に成功した時、墓地に存在する雷族モンスター1体を選択しゲームから除外する。その時、このモンスターの攻撃力は300ポイントアップする!」

ハルベルトが弓を持っていない手を空に掲げると、そこに墓地へ送られたモンスターの姿が現れた。

「私はさつき墓地に送った【超電磁界の天使 イリス】を除外し、攻撃力を300ポイントアップ!」

超電磁界の狩人 ハルベルト
攻撃力：2100 2400

イリスと呼ばれたモンスターが次元の渦に消えると、そこからハルベルトの掲げられた手に雷が落ち、その手には1本の矢が握られていた。

「こ、攻撃力2400!？」

「バトル!【ハルベルト】で【デーモン・ソルジャー】を攻撃!」
エレクトロニック・シュート!」

そしてハルベルトがその矢を弓に添えると、一気に引き絞り、その矢を放つ。

その矢はまるで雷の如く右相の【デーモン・ソルジャー】を貫いた。

「うおおお!!」

右相

LP:4000 3500

少女は即座に手札からカードを2枚抜くと、

「カードを2枚伏せて、ターンエンド。」

それを自分の場にセットした。

少女

LP:4000

フィールド:

【超電磁界の狩人 ハルベルト】

伏せカード:2枚

手札:2枚

2人のライフはそれぞれ4000と3500。

場のモンスターを比較しても、現状は少女が有利である。

それでも少女は特に余裕を見せず、右相の動きを慎重に見定めていた。

「俺のターン！」

右相がカードを引く。

すると彼は楽しそうに笑った。

「お譲ちゃん、君がシンクロ召喚を使うとは恐れ入ったよ。」

それは先ほどの挑発ではなく、純粋な称賛の言葉だった。

「だがこの勝負、デュエリストとしてますます負けられなくなったぜ！」

そう言つて少女を睨みつける目には本気の色が見え隠れしていた。

「じゃあ、かかってきなさい！全力で！」

それと対峙して少女も笑う。楽しそうに笑う。

「吠え面かくんじゃねえぞ！俺は手札から【古のルール】を発動し、手札から【タルワール・デーモン】を特殊召喚！」

タルワール・デーモン

属性：闇

レベル：6

攻撃力：2400

右相が発動させた【古のルール】のカードの中から2本の剣を持った悪魔が姿を現す。

「【古のルール】、確か手札から上級の通常モンスターを特殊召喚できる魔法カードだったわね……。」

「それだけじゃねえぜ！俺はこの【タルワール・デーモン】をリリース、手札から【偉大魔獣 ^{グレート} ガーゼット】をアドバンス召喚！」

偉大魔獣 ガーゼット

属性：闇

レベル：6

攻撃力：0

右相の場の【タルワール・デーモン】を虹色の光が包み込むと、中から筋骨隆々の悪魔が姿を現した。

「【ガーゼット】の効果発動！このカードの攻撃力はリリースしたモンスターの2倍になる。リリースした【タルワール・デーモン】の攻撃力は2400、つまり！」

偉大魔獣 ガーゼット

攻撃力：0 4800

「4800!？」

少女もその桁違いの攻撃力上昇には驚きを隠せない様子であった。

「バトル!【偉大魔獣 ガーゼット】よ、奴のシンクロモンスターを蹴散らせ!」

右相の指示を受け、【ガーゼット】が【ハルベルト】に襲いかかる。

【ハルベルト】は【ガーゼット】の攻撃を受け止めるものの、抑えきれずにそのまま吹き飛ばされ破壊された。

「くっ!」

少女

LP：4000 1600

圧倒的な【ガーゼット】の攻撃力により、少女のライフは一気に削られた。

「でもこの瞬間に罨カード【スパーク・ウェーブ - デストロイ-】!私の場の『超電磁界』と名のつくシンクロモンスターが戦闘で破

壊された時、相手モンスターを1体破壊する！」

少女の場に【スパーク・ウェーブ - デストロイ-】が現れる。

しかし、

「そんなことさせつかよ！手札から速効魔法【我が身を盾に】！ライフを1500支払うことで、「フィールド上のモンスターを破壊する効果」を持つカードの発動を無効にし破壊する！」

右相

LP：3500 2000

右相の場に現れた【我が身を盾に】の光によって、少女の【スパーク・ウェーブ - デストロイ-】の動きが止まる。

「まだだぜ！さらに手札から【連鎖爆撃^{チェーン・ストライク}】を発動！現在このカード以外に発動されている魔法・罫カードの数×400のダメージを与える！」

ライフを僅かにしながらも、右相の追撃は止まらない。

「現在発動しているのはお前の【スパーク・ウェーブ - デストロイ-】と俺の【我が身を盾に】、そしてこの【連鎖爆撃】の3つ！つまりお前は1200ポイントの追加ダメージを受ける！」

「なっ！ぐう・・・！」

右相の場に現れた【連鎖爆撃】から光が放たれ、それが少女を襲う。

少女

LP：1600 400

「どうだ！」

自身の持てる全力をぶつけライフを逆転させた右相は、勝利の笑みを浮かべる。

しかし光が収まると少女の場には1体のモンスターが現れていた。

「なに、モンスター！？」

予想外の出来事に右相も目を見張る。

「【ハルベルト】のもう1つのモンスター効果、フィールド上に存在するこのカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られたターンのバトルフェイズ終了時、自身の効果で除外された雷族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。私はこの子の効果で除外した【超電磁界の天使 イリス】を特殊召喚する！」

超電磁界の天使 イリス

属性：光

レベル：2 チューナー

攻撃力：700

「だが、そんな攻撃力で俺の【ガーゼット】は倒せない！しかもお前の切り札も既に敗れた！俺に負けはねえ！」

なおも食い下がる少女に右相は強気な姿勢を貫く。

「ターンエンドだ！」

右相

LP：2000

フィールド：

【偉大魔獣 ガーゼット】

【最終突撃命令】

伏せカード：0枚

手札：0枚

「私のターン！」

一気にライフを削られ、窮地に立たされる少女。

しかし、少女の口からは……、

「あんた、凄いわね！」

右相のデュエルを称賛する言葉と皮肉0の笑みであった。

「はっ？」

その言葉にはさすがの右相も呆気にとられる。

「さっきのターン、凄い気迫だった！いつでも全力投球みたいな感じで、こっちなんか全然息をつく暇がないんだもん！」

少女の瞳は完全にこの状況を楽しんでいた。

「うん、私あんたとのデュエル楽しいと思う！」

そう言つて少女は右相に笑いかける。

「い、いいからさっさとデュエルを進めやがれ！」

そんな少女の素直な感想に右相はまたしても顔を真っ赤にして怒鳴った。

しかし、それは『怒り』ではなく『照れ』であるのはそこにいる誰もがわかった。

「オーケー！じゃあ、私も切り札を見せてあげる！」

「切り札だと！？」

右相はその言葉に驚く。

なぜなら、彼女の切り札は先ほどのシンクロモンスターだと思っていたからだ。

「既にこっちの場も整ってるのよ！畏発動【スパーク・ウェーブ・ミラーージュ】！」

少女の場に伏せられていたもう1枚のカードが開かれる。

「このカードは通常召喚を行わない代わりに、墓地の雷族モンスター1体を除外することで、そのモンスターと同レベルのトークン1体を自分フィールド上に特殊召喚することができる。

……私はレベル5の【ハルベルト】を除外し、トークンモンスターを特殊召喚！」

ミラージトークン

属性：光

レベル：5

攻撃力：0

そしてそこから【ハルベルト】の姿を模したトークンが出現した。

「レベル2のチューナーモンスターにレベル5のモンスター……。」「

右相は少女の狙いに気がつくが、もはや彼女を止めることはできなかった。

「いくわよ！レベル5の【ミラージトークン】にレベル2の【イリス】をチューニング！」

彼女の掛け声と共に、2体のモンスターが宙に舞う。

まずは【イリス】が手から電気を発すると、それが自信を包み込み、2つの輪となった。そこに【ミラージトークン】が入り込み5つ

の星となる。

「紡がれし雷が交差する時、全てを撃ち抜く金色の矢となる！」

レベル：2 + 5 = 7

そして強大な光が少女の背後に突き刺さる。

「シンクロ召喚！全てを貫け、【超電磁界の砲口 レールガン】！」

超電磁界の砲口 レールガン

属性：光

レベル：7 シンクロ

攻撃力：2500

光の柱を持っている銃で振り払い、【ハルベルト】とは明らかに違う形の装甲をまとった戦士がフィールドに降り立った。

そのモンスターの姿を見て、今まで言葉を発することも忘れていたギャラリーの男がはっと息をのんだ。

「聞いたことがある。DAの生徒には、プロにすら匹敵するほどの腕を持つエリートデュエリストがいて……、」

その人物は何故かストリートデュエルに顔を出し、目的もなくあらゆるデュエリストに挑んでは勝利を収めていった……。

「そいつはいつしか、そのエースモンスターの名前を借りて、こう

呼ばれた……。」「

『レールガン 超電磁砲』 御坂美琴

その名前と共に、ギャラリーの中でどよめきがあがる。

「超電磁砲……こいつが。」

右相もまた少女”美琴”の正体に勘づき、驚きの声を上げる。

「【レールガン】の効果発動！このカードのシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。対象は右相さんの【偉大魔獣 ガーゼット】！」

美琴が【ガーゼット】に指を差すと、【レールガン】は銃を重々しく構える。

「『レベル1、ファイア！』」

そして掛け声とともにその銃口からレーザーにも近い弾丸が発射され、【ガーゼット】は瞬く間に砕け散った。

「俺の【ガーゼット】が……一撃！？」

「バトル！【レールガン】で右相さんにダイレクトアタック！『レベル2、ブリッツ！』」

「うおおおおああああ！！」

さらに打ち出された【レールガン】の弾丸が右相を貫いたのだった。

右相

LP：20000

「はい、私の勝ち！」

そう言って美琴はデッキにカードを戻すと、快活に笑った。

「ちつくつしょー！」

対する右相は悔しげにしゃがみこむが、そこに暗い雰囲気はない。

むしろ全力を出し切ったことに対する爽快感があった。

「おい、御坂とか言っただな！」

「え、はい！」

突然立ち上がってこちらに指を差す右相に美琴も返事を返す。

「次は絶対に負けねえからな！」

そう吐き捨てると、仲間たちを連れてその場を後にした。

その様子を見て、美琴も満足そうに、

「うん、また必ず!」

とつぶやいたのだった。

――
美琴が路地裏を出ると、そこはいつもの街の風景。

<さあ次はキングのターン! チャレンジャーの鉄壁の防御をどう崩すのか!??>

<ふん、キングの俺にそんな小細工が通用しないことを教えてやろう!>

街のモニターには相も変わらずデュエルキングのデュエルが放送されている。

――何も変わらない街

――何も変わらない光景

それを見て、美琴の中にあつた楽しい気持ちは一瞬で冷めきつた気がした。

「……ほんと退屈よね、この街は。」

思わず美琴はそんなことを口にした。

第2話『超電磁砲（レールガン）』（後書き）

速攻でおわかりかと思いますが、
美琴の使うデッキはオリカで構成されたデッキです。

やはり元々の原作上、彼女には雷族デッキを、と思ったのですが、
なかなかめぼしい物が見つからなかったため、
「ないんだったら作ってみよう！」という考えから作成してみました。

モデルは『氷結界』シリーズのモンスター軍で、
描写があまりできてはいないと思いますが、
あちらが和風なのに対し、こちらは西洋をイメージして作っています。

何か変なところがあれば、ご指摘をお願いします。

ちなみに今回登場した右相のデッキは、

【偉大魔獣 ガーゼット】を中心としたパワーデッキです。

第3話『めぐりあう少女と少女』（前書き）

この小説を読んでくださっている方へ、

この小説をお気に入りにしてくださっている方へ、

この小説の感想、評価をしてくださった方へ、
蜻蛉屋です！

今回はこの作品初となる非デュエル回です。

そしてデュエルアカデミアのことが中心となります。

それではどうぞ！

第3話『めぐりあう少女と少女』

ネオ童実野シティに存在するデュエリスト養成する学校『デュエルアカデミア（DA）』。

この学校はネオ童実野シティに3校存在し、シティ『サクガワエリア』の「サクガワ校」、トップス『トキワダイエリア』の「トキワダイ校」、そしてネオ童実野シティ1を誇る規模の「ネオドミノ校」となっている。

3校はそれぞれの教育方針を取り、時には交流試合などを行い、密に情報を交換して多くのデュエリストを世に送り出していた。

トキワダイ校 デュエル場

現在全てのアカデミアでデュエルの実力を測る『実技テスト』が行われていた。

「【レールガン】で相手にダイレクトアタック！『レベル2、ブリッツ』！」

そこにはトキワダイ校の高等部所属である御坂美琴がちょうど、相手の生徒にとどめの一撃を与えていた。

「きゃあああああー！！」

DA女生徒：

LP：12000

相手のライフが0になるとそれぞれの場からカードが消え、そこには戦いを終えた2人が残る。

「良いデュエルだったわ。またやりましょ！」

美琴はカードをデッキに戻すと、相手の女子生徒にそう笑いかけた。

「は、はい！いつでも、よろこんで！」

笑いかけられた相手の女子生徒は、顔を赤らめながら礼儀正しくお辞儀するとそそくさとデュエル場を後にする。

「ナンバー10550、御坂美琴、実技試験結果92/100！見事なデュエルでした。」

デュエル場を降りると、デュエルの行方を見守っていた試験官が手持ちのタッチパネルを操作し、そこから出力された用紙を美琴に手渡す。

「ありがとうございます。」

美琴はそれを受け取り、隅のベンチに座ってデュエルの様子を詳細に書き記されたデータに目を通し始めた。

「えーと……、『後攻での行動選択に改良の余地あり』、『攻撃時にもう少し警戒する必要あり……うひゃっ!?!』」

得点の割にやたらと多い試験官からの指摘に目を通していると、急

に彼女の横からツインテールの少女が抱きついてきた。

「ちよっ黒子！なにすんのよ！？」

「ああんお姉さま！黒子は見えていましたの！華麗なカード捌き、どんな時にも崩すことのないあの凛々しい表情、もう黒子は！黒子はああー！！」

「なんでもいいからは、な、せつ！」

「あう！」

なにやら興奮気味に頬ずりしてくる少女、白井黒子の顔面に美琴は思い切り肘打ちを喰らわせる。もろに受けた黒子はそのまま吹き飛び悶絶した。

↓

「時にお姉さま、今日の約束を覚えておいでですか？」

美琴の制裁から復活した黒子は美琴の隣に座り直すと、彼女に尋ねる。

「約束？」

しかし美琴は覚えていないようで、その様子に黒子は呆れたようにため息をついた。

「今日、わたくしの親友に会うという話ですね。先日にもお伺いしたはずですが……。」

それを聞いて美琴はああ、と思い出したかのように両手をポンとつく。

「……ごめん忘れてた。」

「やっぱり。」

黒子は予想していたのか、驚く素振りを見せずただ呆れていた。

「しっかりしてくださいまし！あの子、お姉さまのファンなのですから。」

「ファン……。」

と、強い口調で説教をする黒子。しかし黒子の『ファン』という言葉に美琴は渋い表情をした。

その表情から何かを察したのか、黒子は「大丈夫ですわ」と付け加える。

「お姉さまが、常日ごろ後輩たちから受けている無礼の数々は存じておりますわ。……しかし初春はわたくしが認めた親友。お姉さまが思うような無礼は働かないかと。」

見透かすような黒子の言葉に美琴は渋々と「そうね」と答えた。

「……まあ、あんたのことはそれなりに信用はしてるし、その初春さんに会うというのにも反対はないけど……。」

「お姉さま、今わたくしのことを『信用してると』!?」

唐突に詰め寄ってくる。

その剣幕に美琴は顔を引きつらせながら、

「え、まあ、それなりに……。」

と答えるが、黒子の耳に入っていないのか、黒子は急につつとりした表情で美琴に抱きついてきた。

「お姉さま〜! そんなにも黒子のことを大事に思っていて下さったのですね〜!」

「だからやめろつつうの!」

そんな黒子を美琴が派手に叩きのめしたのは言うまでもない。

―サクガワ校 校門前

「はあ〜……。」

自分の試験結果を眺めながら、サクガワ校中等部に所属する初春飾利は大きくため息をついた。

そんな彼女の背後から、同じ制服を着た黒髪長髪の少女が1人近づいてきて、

「う〜い〜は〜る〜!」

おもむろに彼女のスカートを盛大にめくったのだった。

「……ほえっ？」

「お、今日は水玉か。」

突然のできごとに一瞬呆ける初春と、楽しげにスカートの中を確認する少女。

初春はやがて状況を理解したのか、

「さ、さ、さ、佐天さん！いきなりなにをするんですか！？」

と、顔をトマトのように真っ赤にして当事者、佐天涙子に抗議する。

「いやいや、1日1回は初春のパンツ見ないと負けかな？っと思つて。」

「意味がわかりませんよ！しかもこんな公衆の面前でやめてください！」

その後も何度かやりとりが続くが、まるで懲りていない佐天にやがて初春も諦めたのか、

「……それでどうしたんですか？」

と、佐天に話を振る。

そこで佐天は「あ、そうそう」と思い出したかのように、

「試験の方はどうだった？」

今日のD Aで行われた試験結果を尋ねた。

訊かれた初春はもう一度盛大にため息をつくと、首を横に振る。

「ありゃ、今回も駄目だったの？」

「はい、試験官の人にも『お前の花飾りはただの飾りか？お前もその花のようにデュエルで大きく咲き誇れ！』と言われました……。」

そう言つて自分の頭を指差す初春に佐天は「なんだそりゃ？」と今はいない試験管へとツツコミを入れた。

「今回もまたこの子達に嫌な思いをさせてしまいました……。」

そう言つて初春はデッキケース越しに自分のデッキを撫でる。

その仕草は、まるでぬいぐるみを愛でる子供のようであつたが、

「……なんか言ってるの？」

佐天はそれを特に指摘することはない。

「……デッキの中で井戸端会議状態です。議題は『どうして自分達の攻撃力はこんなにも低いのか？』ですかね。」

「……それ、話し合つてどうにかなるもんなの？」

「さあ……。」

佐天のツッコミに初春はまたしてもため息をついた。

「ねえ初春、今日『セブンスミスト』に行かない？新作の服が入ってるんだってさ！」

気を取り直して佐天が初春に今後の予定について提案する。

しかし初春は一瞬顔を輝かせたものの、すぐに申し訳なさそうに顔を顰めた。

「ありや、既に先約がいた感じ？」

「……はい、申し訳ないのですが、今日は白井さんと約束が……。」

「白井さん？……『ジャツジメント』の？」

佐天は初春が”ジャツジメント”に所属していることを知っている。

そのため初春からのまた聞きではあるが、黒子の名前も知っていた。

「はい！今日は念願になって、あのトキワダイ校のエース、御坂美琴さんに会わせてくれることになってるんですよ！」

と顔を輝かせながら言う。

……先ほどのテンションはどこへやらである。

その様子が面白くないのか、佐天はただ「へえ……。」「とだけ返事をした。

「あれ？佐天さん、あまり驚かないんですね？」

それを不思議に思い、初春は頭にクエスションマークを浮かべると、

「御坂美琴ってあれでしょ？あのプロデュエリスト候補とも言われる強豪デュエリストの……。」

「そうなんです！私、前回の大会を見に行っただんですが、最後はプロ相手に凄い戦いを繰り広げたんですよ！」

目を輝かせながら答える初春に佐天は顰め面で、

「ああいう輩って自分よりも下の人間を見下すじゃん、ああいうのってむかつくだよね。……ちょっとデュエルが強いからってさ。」

「はあ……。」

「それにトキワダイのお嬢様ときた。……あいつら、少し良い生まれだからって自分の能力をかさにしてるし、自分より能力低い奴をすぐに見下すし……。」

彼女の言っていることはあながち間違いではなく、

『トキワダイ校』の生徒はそのほとんどが上流階級である『トップス』の出身であり、その能力も高水準である。

そのため、周囲を見下す傾向にある生徒もまた多く、特にシティ出身の生徒に対する扱いはとても酷いものであることが多い。

「それに初春、あんた以前にもトキワダイの奴らに絡まれてたじゃん？」

それはテスト実施前日のできごとで、「テスト前の力試し」を題目にちょうど帰宅途中であつた初春に目をつけたトキワダイの生徒が彼女にデュエルを強要したのだった。

初春もそのことを思い出したようだが、

「大丈夫ですよ。私は白井さんを信じてますから。」

と、笑いながら佐天の懸念を否定した。

「それに御坂さんはどうやら『強いデュエリスト』と戦うのが好きらしいので、きっと私よりも佐天さんの方に勝負を仕掛けてきますよ！」

「なんで私！？」

突然話が逸れ、自身に向けられる佐天。

「あの時、私を助けてくれたのは佐天さんじゃないですか？」

と、またも目を輝かせながら佐天を見つめる初春。

「かつこよかったですよ」。2人のトキワダイ生徒相手に勝つてしまうんですから。」

「あれは……相手が大了たことなかつただけでしょ？」

佐天はバツが悪そうに頬を掻く。

「謙遜することなんてないですよ。あ、佐天さんも一緒に行きませんか？」

「ええ、ちよつ、こら初春！」

「いえ、一緒に行きましょう！きつとそれがいいです！」

テンションが上がりきっている初春を止められず、ほとんど引き摺られる形で佐天は初春に同行することとなった。

―やだなあ……。

そんなことを考えながら、美琴に会うことを渋る佐天。

しかし美琴との出会いによって、彼女の人生に大きな転機が訪れることを彼女はまだ知らない。

……そして、

「あ……。」

「「あ……。」」

集合場所であつたファミレスにて、黒子に抱きつかれている美琴を見ることも……。

「ではご紹介いたしますわ。初春、こちらにいますのが御坂美琴お姉さま、そしてお姉さま、こちらがたくしの友人の初春飾利ですわ。」

先ほど美琴に殴られた頭を押さえながら、黒子はそれぞれの紹介をしました。

「よ、よろしく願います！」

初春は若干緊張気味にあいさつをする。

「うん、よろしく！」

対する美琴は快活にあいさつした。

「初春、そちらの方は？見れば高等部の方みたいですが……。」

今まで傍観していた佐天に話題が振られ、初春が紹介をしようとするが、

「ども、初めまして。初春の友人の佐天涙子です。ちなみに所属は『サクガワ校』で、大会受賞経験も何もありません！」

「さ、佐天さん！」

初春を押しつけ、しかも半ば挑発気味にあいさつする佐天。

そんな彼女の行動に初春は困惑する。

……だが、

「佐天……？」

佐天の名前を聞いて、何故か美琴だけが何かを考え込む仕草をした。

「お姉さま、どうかなさいましたか？」

「いや、どつかで聞いたような……。」

それを不思議に思った黒子が尋ねるが、美琴は自身の記憶を探るのに必死だ。

「……私になにか？」

そんな予想外の反応に佐天も若干困惑する。

……やがて、

「あ、思い出した！」

美琴は柏手を打って、唐突に佐天の手を掴んだ！

「え、ええ！？」

「佐天さん！もしかして昨日、トキワダイの生徒を2人まとめて倒したっていう佐天さん！？」

先ほどの初春よろしく目をランランに輝かせ、興奮気味に聞いてく

る美琴に佐天は困惑気味に頷いてみせる。

「でもあれはこっちの引きがよかったただけで……。」

「いやいや謙遜しなくていいって！……まさかこんな所で会えるだなんて私も運がいいわ！」

「え、いやぁ……はは。」

例え一方的に嫌っている相手でもトキワダイのエースにここまで称賛されてしまうと、佐天も内心悪い気はしない。

「でさ、唐突で悪いんだけど……。」

「はい？」

「私とデュエルしない！？」

―ネオ童実野シティ 広場

（どうしてこうなった……？）

意気揚々と自分の前を歩く美琴、そしてその隣であれやこれやと愚痴を言う黒子。

そして、

「あの御坂さんとデュエルできるだなんて、佐天さんは本当に幸せ者です！」

自分の隣でまるで我がことのようにはしゃぐ初春。

（私は別に、デュエルなんかしたくないんだけどなあ……。）

そんな彼女たちに囲まれて、佐天は小さくため息をついた。

「ここらへんなら大丈夫かな？」

ちょうど良く開けた場所に出た4人。

そこで美琴は自分のバッグを置くと、中からデュエルディスクを取り出し、腕に装着した。

「佐天さんは？」

「えっ？あっ！」

その慣れた手つきに思わず見惚れていた佐天が、慌てて自分のバッグの中を漁ろうとするが、

「……そういえば自前の、持ってないです。」
と、少々バツが悪そうに答えた。

本来、市販のデュエルディスクは例え中古の物でも少々高額なため、大抵のDA生徒は学校側から貸し出されている物を使っている。

「資金の面で行きますとサクガワは他の2校よりも待遇が悪いので、デュエルディスクの貸出しはしてないんですよ。」

階級社会であるこの街ではよくある光景である。

その話を聞いて美琴は少し考え込むが、すぐに名案が思い浮かんだのか、佐天の方に近づいた。

「御坂さん……？」

その行動を不思議に思った佐天が若干身構える。

そんな彼女に向かって美琴は、自分が今装着しているデュエルディスクを指さしてこう言った。

「それじゃあこれ、貸してあげる！」

「へっ？」

その発言に3人が一瞬凍りつくが、

「お姉さま！自身が身につけている物を軽々しく他人にお貸しになるなど、淑女として言語道断ですわ！」

最初に復帰した黒子が猛抗議を始めた。

「え、だって私と佐天さん、体格がだいたい同じだから名案かと思っただけど……。」

「そういう問題ではありません、ですの！どうしてお姉さまはそうやって……。」

「うわぁ、御坂さんが愛用しているデュエルディスクでデュエルできるなんて凄いことですよ！」

美琴の行動に怒号する黒子。

どうして黒子に怒られているのか理解していない美琴。

ただただ興奮して目を輝かせる初春。

「え〜っと。」

話題の渦中であるはずの佐天は完全に置いてけぼりにされ、ただただ周囲の状況を見守ることしかできなかった。

第3話『めぐりあう少女と少女』（後書き）

佐天涙子が初登場！

そしてやはり捏造しています。

詳細はキャラ設定のところに記載しておきます。

……これで超電磁砲のレギュラーキャラは全員出ましたね。

佐天は私の中ではかなりお気に入りのキャラでしたので、

設定をどうするか、立ち位置をどうするか、すごく迷いましたが、とりあえず今回のようになりました。

次回は美琴VS佐天となります！

楽しみにしていただけると嬉しいです。

……ちなみに、

佐天のデッキは私のお気に入りモンスターをエースにしています。

第4話『御坂vs佐天 鉄壁の壁！深海龍 ギシルノドン』（前書き）

この小説を読んでくださっている方、

この小説をお気に入り登録してくださった方、

この小説の感想・評価をしてくださった方、

本当にありがとうございます、蜻蛉屋です。

今回は題名通り美琴vs佐天という、

原作ではありえない組み合わせの戦いです。

それではどうぞ！

第4話『御坂vs佐天 鉄壁の壁！深海龍 ギシルノドン』

「佐天さん、準備はいい？」

「は、はい。」

美琴のデュエルディスクを装着し、自分のデッキをそこに装着した佐天が返事をする。

「佐天さ〜ん、頑張ってください〜い！」

「全くお姉さまのデュエル好きにも困ったものですわ……。」

そんな2人から少し離れた場所に腰かけ、ギャラリーに徹する初春と黒子。

（私の気も知らないで……。）

そんな呑気な後輩に心の中で苦言する佐天であった。

「行くわよ！」

「デュエル！」

佐天：

LP：4000

美琴：

LP：4000

2人が同時にデッキからカードを5枚ドローする。

「それにしても初春。」

「なんですか？白井さん。」

ギャラリーとして2人のデュエル開始を見届けた後、黒子は小声で初春に話しかけた。

「あの佐天という方はそんなにお強いのですの？失礼かもしれませんが、見たところそこまでの実力を有しているようには感じませんが……。」

黒子は佐天の実力について疑問視していた。

彼女も”ジャッジメント”として数々のデュエリストを見てきた。

時にはプロのデュエリストとも対峙することだってある。

そうしてデュエリストを見る”目”というものを養ってきた黒子でさえ、美琴とデュエルをする佐天にそこまでの実力を見出せずにいた。

「……ふふ。」

そんな黒子の苦言に初春は嫌な顔一つせず、むしろ得意げに笑った

のだった。

「……なんですか？」

初春の一言に怪訝そうな表情をする黒子。

「白井さんも見ていればわかりますよ。……だって佐天さんはサクガワ校の『影のエース』なんですから！」

「影のエース……？」

「まあ、私が勝手にそう呼んでるだけですけどね。」

「先攻は私がもらいます、ドロー！」

先攻となった佐天がカードを1枚ドローする。

そのカードをちらりと一瞥すると、

「私はチューナーモンスター【深海のデューヴァ】を召喚！」

それをそのまま自分のデュエルディスクにセットする。

すると彼女の場に人魚のような容姿をした女性型のモンスターが現れた。

深海のデューヴァ

属性：水

レベル：2 チューナー

攻撃力：200

「いきなりチューナー？」

美琴も警戒の色を強める。

「でもチューナーだけではシンクロ召喚もできないのでは？」

黒子は佐天の行動に疑問を感じるが、その疑問はすぐに解消された。

「【深海のディーヴァ】の効果発動！このカードの召喚に成功した時、自分のデッキからレベル3以下の海竜族を1体特殊召喚します！」

佐天の言葉に呼応するように、【深海のディーヴァ】が歌を歌い始めると、佐天のデッキから1枚のカードが引き出された。

「私はデッキから海竜族モンスター【シー・アーチャー】を特殊召喚！」

そしてそのカードを抜き出してディスクにセットする。

シー・アーチャー

属性：水

レベル：3

攻撃力：1200

場に弓を持ち、巨大な魚に乗った人魚が現れる。

「いきなり場に2体のモンスターを……。」

その光景に黒子も驚きを隠せなかった。

「私はレベル3の【シー・アーチャー】にレベル2【深海のディーヴァ】をチューニング！」

佐天の掛け声に2体のモンスターが宙を舞う。

そして【深海のディーヴァ】が光に包まれ2つの大きな輪となり、その中に【シー・アーチャー】が入り、3つの星となった。

「研ぎ澄まされし意思の波紋、全てを押し流す大きな波となる！」

やがてそれらは1本の光の柱となる。

レベル：2 + 3 = 5

「シンクロ召喚！【深海龍 ギシルノドン】！」

深海龍 ギシルノドン

属性：水

レベル：5 シンクロ

攻撃力：2300

光の中から現れたのはまるで水がそのまま竜の姿を模したようなドラゴンであった。

「私は更にカードを1枚セットしてターンエンド!」

佐天：

LP：4000

フィールド：

【深海龍 ギシルノドン】

伏せカード：1枚

手札：4枚

「先攻からのシンクロ召喚とは……。」

「佐天さんお得意の戦法ですよ!」

何故か得意げに言う初春だが、黒子は驚きの表情から一転すぐに余裕の表情となった。

「お姉さまを甘く見ないことですね、初春。」

「ほえ?」

|

「いきなりシンクロ召喚とはやってくれるじゃない！……私のターン！」

佐天の行動に美琴は楽しそうに笑いながらデッキからカードをドロ―する。

「私は【超電磁界の戦士 ウォルター】を攻撃表示で召喚！」

超電磁界の戦士 ウォルター

属性：光

レベル：4

攻撃力：1700

美琴の場に雷を象ったような鎧の戦士が現れ、持っている剣を天にかざす。

「【ウォルター】の召喚に成功した時、自分の墓地にモンスターカードが存在しなければ、デッキからレベル5以下の雷族モンスター1枚を手札に加えて、その後に手札からカードを1枚墓地に送る。」

その宣言と共に美琴のデッキからカードが1枚抜きだされた。

それを手札に収めると、手札から別のカードを墓地に送る。

「手札に加えた【超電磁界の妖精 ゲコン】の効果発動！自分フィールドに雷族モンスターがいる状態で、このカードがデッキから手札に加わった時、このカードを特殊召喚するわ！」

超電磁界の妖精 ゲコン

属性：光

レベル：1 チューナー

攻撃力：300

ウォルターの隣に雷を纏ったカエルのマスコットのようなモンスターが姿を現す。

「チューナーモンスター！」

佐天もすぐに美琴の狙いを読む。

「まだまだ、レベル4のウォルターにレベル1のゲコンをチューニング！」

美琴の宣言と共に、2体のモンスターが宙に舞う。

【ゲコン】が身体を精いっぱい膨らまして1つの輪になると、そこに【ウォルター】が入り込んで4つの星となる。

「紡がれし力が、我が敵を狩る狩人が解き放つ！」

レベル：1 + 4 = 5

「シンクロ召喚！攻め落としなさい、【超電磁界の狩人 ハルベルト】」

超電磁界の狩人 ハルベルト

属性：光

レベル：5 シンクロ

攻撃力：2100

そして光の中から【ウォルター】と同じ模様の鎧を身に纏った弓兵が現れた。

「【ハルベルト】の効果発動！このカードのシンクロ召喚に成功した時、墓地に存在する雷族モンスター1体を選択しゲームから除外する。その時、このモンスターの攻撃力は300ポイントアップする！」

【ハルベルト】が弓を持っていない手を空に掲げると、そこに1体のモンスターが現れた。

「私は墓地に送った【超電磁界の天使 イリス】を除外し、攻撃力を300ポイントアップ！」

超電磁界の狩人 ハルベルト

攻撃力：2100 2400

【イリス】が次元の渦に消えると、そこから雷が落ち、ハルベルトの掲げられた手の中で1本の矢へと変わった。

「すごい！」

その派手な演出に初春は感動を覚えた。

「あれがお姉さまの戦いですわ。例え相手がどんなに早い展開をしてきても、それに対応し、それ以上のパワーでねじ伏せる。」

黒子が見たところ佐天の速攻シンクロ召喚は驚きであつたが、今は美琴の【ハルベルト】の方が佐天の【ギシルノドン】よりも上、ならばこのターンは美琴の勝ちとなる。

……だが、

「かかりましたね……？」

「えっ……？」

佐天の笑みに、バトルを行おうとした美琴は動きを止めた。

「【深海龍 ギシルノドン】の効果発動！このカードが表側表示で存在する場合、フィールド上に存在するレベル3以下のモンスターが墓地に送られたターンのエンドフェイズまで、自身の攻撃力を3000にする！」

深海龍 ギシルノドン

攻撃力：2300 3000

「御坂さんの【ゲコン】がシンクロ召喚に使われたことにより、私の【深海龍 ギシルノドン】はその攻撃力を3000にすることができます！」

「嘘お！」

一気に攻撃力を逆転され、美琴は驚きの声を上げる。

「攻撃力3000!？」

その光景に黒子も驚愕の声を上げた。

しかし、それは決して佐天の【ギシルノドン】の攻撃力に対してではない。

（あの佐天という女、お姉さまがシンクロ召喚するのを読んでいたということですか？）

美琴の速攻シンクロに見事対応した佐天に対し、黒子は先ほどまでの評価を変えたのだった。

「さあ、どうしますか？」

出鼻を挫かれた美琴に対し、佐天が煽りを入れる。

それに対して美琴は、少し考える仕草をしたあと、

「私はカードを2枚伏せて、ターンをエンド！」

守りの姿勢を固めた。

ターンが終了したことにより、佐天の【ギシルノドン】の攻撃力が2300に戻る。

深海龍 ギシルノドン

攻撃力：3000 2300

御坂：

LP：4000

フィールド：

【超電磁界の狩人 ハルベルト】

伏せカード：2枚

手札：2枚

「私のターン、ドロー！」

佐天がカードを1枚ドローし、それを見て微かに笑った。

「御坂さん、私のモンスターの効果は発動ターンのみ、だからこのターンで御坂さんのモンスターが破壊されることはない、と考えているでしょう？」

自分の狙いを読まれたが、美琴は無言を通す。

「私は手札から【おとぼけオポッサム】を召喚！」

おとぼけオポッサム

属性：地

レベル：2

攻撃力：800

「【おとぼけオポッサム】の効果発動！相手フィールド上にこのカードよりも攻撃力が高いモンスターが存在する場合、このカードを破壊することができる！」

現れた【おとぼけオポッサム】はその場で身体を丸めると、煙に覆われてその姿を消した。

「これにより、【ギシルノドン】の効果発動！」

深海龍 ギシルノドン

攻撃力：2300 3000

「また攻撃力を……。」

再度攻撃力が自分の【ハルベルト】を上回り、美琴も苦悶の表情を浮かべた。

「バトル！【深海龍 ギシルノドン】で御坂さんの【超電磁界の狩人 ハルベルト】を攻撃！『ハイドロ・カノン』！」

佐天の指示と共に【ギシルノドン】の口が開き、【ハルベルト】に向けて強力な水流を放つ。

【ハルベルト】は為す術もなく水流に吹き飛ばされ、その姿を散らせた。

「くっ！」

御坂：

LP：4000 3400

「お姉さまのライフを先に削った……。」

ギャラリーの黒子は目の前で起こった事態を信じられずにいた。

しつこくなるが、美琴は『トキワダイ校』でトップの成績を誇るエースであり、その実力は黒子の見てきたデュエリストの中でも上位に位置する。

そんな彼女が影のエース（初春談）とはいえ、いちデュエルアカデミア生徒に対し、ここまで遅れをとることは今までなかったのである。

「どうですか白井さん！これが佐天さんの実力ですよ！」

その対戦相手の友達ということもあり、初春はまるで我がことのように鼻高々であった。

対する黒子は少し表情を固くするが、

（…………お姉さま？）

俯いて動かなくなった美琴を見て、すぐに安堵の息を人知れず吐いた。

（これは久しぶりに『来ます』わね……。佐天さんとやら、心から同情いたしますわ。）

そう呟く黒子の言葉を、初春は聞き取ることができなかった。

「御坂さん？」

突然俯いて何も言わなくなった美琴。

佐天は彼女に何が起きたのかわからず声をかけてみたが、美琴からの返答はない。

（先制でライフ減らしたのがまずかったのかな……。）

突如言いような不安が佐天の中を支配する。

（だからやりたくなかったのよ。無駄にプライドの高いトキワダ

イ校のお嬢様となんて〜！）

突然ダメージを与えられた美琴が怒ったのだと思い、佐天の中にやり場のない怒りがこみ上げてくる。

（これで目をつけられたらどうしよう……。）

佐天は恐る恐る美琴の反応を伺うと、突然美琴が顔を上げた。

「くっは〜！！」

しかしその表情は佐天の想像とは裏腹に、満面の笑顔。

さらには『お嬢様』とはとても形容しがたい謎の奇声をあげていたのだった。

「黒子、黒子！すっごいよ本当に！噂通りというよりもそれ以上！今の全然歯が立たなかった！」

まるでヒーローショーにでも行った子供のようにはしゃぐ美琴。

「お姉さま、淑女がそんなにはしゃいではみっともないですわ。」

それに対し、黒子はまるでそれを見とおしていたように、はしゃぐ美琴を律した。

「それに、いきなりすぎて佐天さんが呆けておりますわよ。」

そう言つて黒子が促すと、彼女の言う通り佐天は呆然とはしゃぐ美琴に目を奪われている。

「あ、ごめんごめん！」

それに気付いた美琴は手を合わせて謝罪する。

「……でもすごく楽しいよ佐天さん！こっちの動きを完全にマークしつつ、自分のペースを崩さないその戦術とカード運び。話題になるだけのことはあるわ〜！」

そう言つて笑顔を投げかけてくる彼女を佐天は直視できなくなり、

「い、いえ、ここまでではただ引きがよかつただけです……。」

先ほどまでの勢いを失くし、目を逸らした。

「佐天さん？」

「昨日のことだつて、初春がトキワダイの連中に絡まれてることに腹が立つて、無我夢中でやったことなんです。実際の私は公式試合でも予選敗退ですし、試験でもそこまでいい成績じゃありません。……私は御坂さんが思うような人間ではないんです。」

そう自嘲気味に呟く佐天に、その場を気まずい沈黙がおりる。

だが、

「……戦闘で破壊されたことにより、【ハルベルト】の効果発動！」

「えっ？」

突然デュエルを再開した美琴に目を逸らしていた佐天は思わず顔をあげた。

「フィールド上に存在するこのカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られたターンのバトルフェイズ終了時、自身の効果で除外された雷族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する！来なさい、【超電磁界の天使 イリス】！」

超電磁界の天使 イリス

属性：光

レベル：2 チューナー

守備力：600

先ほどモンスターのいなくなった美琴の場に、雷を象った鎧を纏う女性型の天使が現れる。

「御坂……さん？」

美琴の真意を測りかね、思わず彼女に問おうとするも、

「さあ、これで終わり？」

逆に美琴の方から問い返してきた。

その瞳には蔑むわけでも憐れむわけでもない、先ほどと変わらない『闘士』が宿っている。

それを見ていると、佐天の胸の内にかつてない”何か”が訴えかけてきた。

―このままでは負ける、と……。

「……カードを2枚セットして、ターンをエンド!」

佐天は夢中でカードを場に伏せ、自分のターンを終了した。

佐天：

LP：4000

フィールド：

【深海龍 ギシルノドン】

伏せカード：3枚

手札：2枚

第4話『御坂vs佐天 鉄壁の壁！深海龍 ギシルノドン』（後書き）

美琴のキャラ崩壊中（汗）

…… もう少し原作見直した方がいいでしょうか？

少し佐天が強すぎると思いますが、原作では、

・密かにパンチングマシンで美琴に勝ってたり（どこまで本気かはわかりませんが）

アンチスキル
・大人を追いかけたり

・先走ろうとする美琴を説得したり

等、能力云々を抜きにすると美琴とも対等に渡り合えるんじゃないかな？ と思い、

私の中での美琴と佐天の力関係はこんな感じになりました。

今回は我ながら、デュエル描写・ギャラリィ視点に無理があるなと思いました。

何か良い書き方ってないですかね？

もしあったらご指南の方をしていただけると嬉しいです。

それでは今回はこの辺で。

第5話『楽しいデュエル』（前書き）

この小説を読んでくださっている方へ、

この小説をお気に入り登録してくださっている方へ、

この小説の感想・評価をしてくださった方へ、

本当にありがとうございます、蜻蛉屋です！

今回で美琴vs佐天のデュエルは最後です。

思ったより長くなってしまいましたが、

楽しんでいただけると嬉しいです！

それではどうぞ！

第5話『楽しいデュエル』

御坂：

LP：3400

フィールド：

【超電磁界の天使 イリス】

伏せカード：2枚

手札：2枚

佐天：

LP：4000

フィールド：

【深海龍 ギシルノドン】

伏せカード：3枚

手札：2枚

「私のターン！」

美琴のターンとなり、デッキからカードを1枚引き、手札は3枚となる。

（【ギシルノドン】の効果は半端な手じゃ突破できない……。）

【ギシルノドン】の効果はレベル3以下のモンスターが墓地に送られた場合、その攻撃力を3000にする能力がある。

それを正面から突破することができるモンスターは少ない。

それは先の【ハルベルト】の戦闘で身に染みている。

(……だったら！)

美琴は現状の手札から自分が最善と思う手を選びだす。

「罨カード発動、【フォーン・リフト】！」

美琴は場に伏せてある2枚のカードの内の1枚を発動する。

「このカードは、自分フィールド上の雷族モンスターを手札に戻すことで、自分の手札から『超電磁界』と名のつくモンスター1体を特殊召喚する。私はフィールド上の【イリス】を手札に戻し、手札から【超電磁界の騎兵 リオン】を特殊召喚！」

超電磁界の騎兵 リオン

属性：光

星：4

攻撃力：1200

美琴の場の【イリス】が手札に戻ると、新たに雷の鎧を纏う馬を駆る騎士が現れる。

「【リオン】のモンスター効果、このカードが手札から特殊召喚された時、攻撃力は2倍になる！」

超電磁界の騎兵 リオン

攻撃力：1200 2400

「攻撃力が【ギシルノドン】を上回った!？」

フィールド上のモンスターが墓地に送られなければ効果を発動できない【ギシルノドン】は当然、その攻撃力を変動させることはできない。

「まだいくわよ!手札から【超電磁界の守人 キーン】を通常召喚!」

超電磁界の守人 キーン

属性：光

レベル：3

攻撃力：1400

さらに美琴の場に大きな盾と剣を携えた騎士が現れる。

「【ギシルノドン】の攻撃力を上回っただけじゃなくて、さらに下級モンスターを出してくるなんて……。」

「即座の切り返し、見事ですわお姉さま。」

ギャラリーの初春と黒子も静かに2人の戦いを見守る。

「バトル！【リオン】で佐天さんの【ギシルノドン】を攻撃！」

美琴の宣言と共に【リオン】は持っていた槍を構え、【ギシルノドン】に突進していく。

（さあ、どう止める？）

美琴は自分が【ギシルノドン】より攻撃力の高いモンスターを出すことを見越して、佐天は美琴の【リオン】を破壊する罠カードを仕掛けてくると考えていた。

しかし、そんな美琴の推測とは裏腹に【リオン】の槍は軽々と【ギシルノドン】を貫く。

「くっ！」

佐天：

LP：4000 3900

【リオン】の攻撃の余波が佐天のライフを蝕む。

（え、止めない？）

だが、それこそ美琴にとって予想外のことであった。

「続いて、【キーン】で佐天さんにダイレクトアタック！」

それでもなお美琴は攻撃の手を緩めず、残った【キーン】で攻撃を行う。

【キーン】が放った斬撃も、なんの障害もなく佐天の胴を切り裂いた。

「うああ！」

佐天：

LP：3900 2500

（一体どういふつもり？）

傍から見れば今の行為は『諦め』や『降参』に近い。

しかし、

「御坂さんの【キーン】からのダイレクトアタックにより、私は罠カード【ダメージ・ゲート】を発動！」

佐天はその時を狙っていたかのように、即座にセットされていたカードを発動した。

「【ダメージ・ゲート】！？」

「このカードは、私が受けたダメージ以下の攻撃力を持つモンスターを墓地から特殊召喚することができます！私が先ほど受けたダメ

ージは1400。よって1400以下の攻撃力を持つモンスター【シー・アーチャー】を墓地から特殊召喚！」

シー・アーチャー

属性：水

レベル：3

守備力：200

佐天の場に再び【シー・アーチャー】が現れ、守りの体勢をとる。

「場にモンスターを残されたか……。ターンエンド。」

美琴は内心舌打ちを打ちながらも、自分のターンを終了する。

御坂：

LP：3400

フィールド：

【超電磁界の騎兵 リオン】

【超電磁界の守人 キーン】

伏せカード：1枚

手札：2枚

戦局は美琴に傾いたが、佐天を警戒する姿勢を崩す気はなかった。

「私のターン！」

佐天のターン、佐天がカードをドロ―する。

「このターンのスタンバイフェイズ、自身の効果によって破壊されていた【おとぼけオポッサム】を再び特殊召喚！」

おとぼけオポッサム

属性：地

レベル：2

守備力：600

さらに佐天のフィールドにモンスターが特殊召喚された。

「この状況……。」

佐天のモンスター展開に初春は思わず呟く。

「来ますわね。」

黒子も同じことを考えたらしく、表情を引き締める。

「そして永続罨発動、【魔女の結界】！このカードが表側表示で存在する限り、自分の場のモンスターの種族を『魔法使い族』に変更する！」

佐天の場にセットされていた2枚目のカードが発動する。

「種族変更罫カード!？」

佐天の【魔女裁判】から放たれた光が彼女のモンスターを包み込む。

「そして手札からチューナーモンスター【ナイトエンド・ソーサラー】を召喚!」

ナイトエンド・ソーサラー

属性：闇

レベル：2 チューナー

攻撃力：1300

さらに佐天の場に、刃が透明の大鎌を持ったウサギの魔術師が召喚される。

（来る！佐天さんのエースモンスターが……。）

美琴も佐天を取り巻く雰囲気から、次の状況を予測した。

佐天は一旦深呼吸をすると、

「レベル3【シー・アーチャー】とレベル2【おとぼけオポッサム】にレベル2【ナイトエンド・ソーサラー】をチューニング!」

【ナイトエンド・ソーサラー】が上空へと飛翔すると、【シー・アーチャー】と【おとぼけオポッサム】が同時にその後を追うように

飛翔した。

そして【ナイトエンド・ソーサラー】が手に持った鎌を円状に振ると、それが2つの輪となり、そこに2体のモンスターが吸収される。

「内に秘められし闘志よ、全てを貫く槍となれ！」

佐天の場のモンスターが光の柱に包まれる。

レベル：2 + 3 + 2 = 7

「シンクロ召喚！魔術の王【アーカナイト・マジシャン】！」

アーカナイト・マジシャン

属性：光

レベル：7 シンクロ

攻撃力：400

光がはじけ、その中から白を基調にした魔道着の魔術師が出現した。

「【アーカナイト・マジシャン】がシンクロ召喚に成功した時、このカードの上に魔力カウンターを2個乗せ、その攻撃力を自身の上に乗っている魔力カウンターの数×1000ポイントアップする！」

アーカナイト・マジシャン

MC（魔力カウンター）：0 2
攻撃力：400 2400

【アーカナイト・マジシャン】が手をかざすと、周囲に魔力の帯びた光の塊が2つ出現し、それが合わさって杖の形状となり【アーカナイト・マジシャン】の手に収まった。

「攻撃力2400……。」「

大幅に攻撃力を上げ、美琴の場の【リオン】と並ぶ佐天の【アーカナイト・マジシャン】。

……だが、それだけで終わるとは到底思えなかった。

「まだ行きますよ！永続罨発動【漆黒のパワーストーン】！」

その読み通り、佐天はセットされている最後のカードを発動する。

それによって彼女の場に奇妙な紋章が描かれた巨大な漆黒の石が現れた。

「このカードは発動時に、このカードの上に魔力カウンターを3個乗せます。」「

漆黒のパワーストーン
MC：0 3

「そして【アーカナイト・マジシャン】のもう1つの効果発動！自分フィールド上の【漆黒のパワーストーン】に乗っている魔力カウンターを1つ取り除き、御坂さんの場の【超電磁界の騎兵 リオン】を破壊！」

佐天の宣言と共に【アーカナイト・マジシャン】は持っている杖を掲げる。

すると【漆黒のパワーストーン】から魔力の塊が1つ【アーカナイト・マジシャン】の杖に吸収され、それを美琴の【リオン】に向けた。

漆黒のパワーストーン

MC：3 2

「『アーカナイト・ブラスター』！」

そして杖の先端に魔法陣が展開されたかと思うと、一筋の光の矢が放たれ【リオン】を貫く。

【リオン】は低いうなり声をあげると、そのまま爆発して美琴の場から消滅した。

「くっ！」

近くで起きた爆発に、美琴は思わず片腕で顔を庇う。

「さらに【漆黒のパワーストーン】の上の魔力カウンターを取り除

いて、御坂さんの【超電磁界の守人 キーン】を破壊！『アーカナイト・ブラスター』！」

漆黒のパワーストーン

MC : 2 1

それでも佐天の猛攻は止まらず、【アーカナイト・マジシャン】の効果によって【キーン】も破壊されてしまう。

これによって美琴の場を守るモンスターはいなくなった。

「これで仕上げです！【漆黒のパワーストーン】の効果、1ターンに1度このカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除くことで、

自分フィールド上に存在する魔力カウンターを乗せることのできるモンスターに、魔力カウンター1つを乗せることができる！

私は【漆黒のパワーストーン】の魔力カウンターを1つ取り除き、私の場の【アーカナイト・マジシャン】に乗せる！」

漆黒のパワーストーン

MC : 1 0

アーカナイト・マジシャン

MC : 2 3

【漆黒のパワーストーン】からまた1つ、魔力の塊が【アーカナイト・マジシャン】に乗せる！」

ト・マジシャン】の杖に吸収される。

これによって魔力カウンターのなくなった【漆黒のパワーストーン】が破壊された。

「これで【アーカナイト・マジシャン】の攻撃力をさらに1000ポイントアップ！」

アーカナイト・マジシャン

攻撃力：2400 3400

美琴のライフは3400。

【アーカナイト・マジシャン】の攻撃力が美琴のライフに追いついたのであった。

「す、すごいです佐天さん！まさかあの御坂さんを相手にここまで……。」

終わりに近づきつつある状況、それを制しつつある佐天に、彼女を応援していたはずの初春は思わず感嘆の声を漏らす。

「もしかして、このまま御坂さんに勝ってしまう、なんてことも……。」

あまりの興奮に隣の黒子に声をかける。

しかし対する黒子は追いつめられている美琴の表情から、あることを察していた。

「確かにこの攻撃をこのまま通せば、お姉さまは敗北しますわね……、ですが」

「……ですが？」

「……恐らくお姉さまは、勝ち負けよりも佐天さんに『何か』を伝えようとしている気がするんですの。」

「何かを……伝える？」

「佐天さん。」

佐天がバトルフェイズに入ろうとするのを遮るように、美琴が声をかける。

「な、なんですか？」

今までデュエルに集中していたように見えた彼女から突然声をかけられ、思わず佐天も手を止めて美琴を見た。

美琴は相変わらずデュエル・ディスクを構えたまま、楽しそうに笑っている。

「佐天さんは今楽しい？」

そしてそう佐天に問うのだった。

「佐天さんは今楽しい？」

その言葉に、先ほどまで美琴の気迫に圧されながら無我夢中でデュエルをしていた心が、視界が、少しずつ鮮明になってくる気がした。

「えっと、その……。」

美琴の真意がわからず、困惑する佐天。

「……私は今すごく楽しいよ。こんなに楽しいデュエルができるんだもん。」

そんな彼女に語りかけるように、美琴は胸に手を置きながらなおも話を続ける。

「佐天さんはどう？」

そう美琴に促され、佐天は先ほどまでの自分を振り返るが、

―別に自分はデュエルなんかしたいわけではない。

―今回も運がよかっただけ。

―どうせこの世界では自分よりも強い人がたくさんいる。

—そんな世界でもがいたところで、馬鹿を見るだけだ。

「よく、わかりません……。私はただ無我夢中でやってただけですし……。」

結局答えは見つからず、曖昧に答える。

きっとこれで美琴も妥協してデュエルを再開させてくれるだろう……。

そう思っていたのだが、

「それでいいの!」

美琴は佐天の答えを肯定したのだった。

「『負けたくない』って思ってくれたんでしょ? だから夢中になれたんだよね?」

「恐らくは……。」

「私もおんなじだもん。戦うなら絶対に勝ちたい! お互いにそう思った気持ちで挑むからデュエルは熱くなって、楽しくなると私は思う!」

そうして力強く自分の考えを佐天にぶつける美琴。

「……これ勘違いだったら悪いけど。さっきまでの佐天さん、うう

ん、デュエルを始めてからの佐天さん、すごく楽しそうだったよ。」

コンボを決める瞬間や、今この瞬間、美琴は確かに佐天が楽しそうに感じた。

「楽し……そう?。」

佐天本人は気付いていなかったのか、信じられなさそうな顔になる。今までそんなことは気にしたこともなかった。

いつも負けることばかりを意識しながらデュエルをしていたために、『勝ちたい』と思ったことなど一度もなかったのだ。

—このままでは負ける。

だが、先ほど胸に訴えかけてきた想い。それは今まで一度も思ったことのないことだった。

（私は今どうなんだろ……?）

目の前に力強く立つ美琴。

自分のような人間は相手にもしないと思っていた人が、自分をここまで評価してくれる。

—勝ちたい……。

この一撃で勝つことができる。自然と動悸が早くなるのを感じた。

そして佐天は唐突に理解する。

（これが、『デュエルを楽しむ』ということなのかな？）

運がいい、運が悪いではなく、全力で相手と戦うこと。

相手を貶めるのではなく、美琴のように相手を全力で称賛し全ての力を出し切ること。

そして全力で勝ちに行くこと。

「……御坂さん、いきますよ。」

「ええ、返り討ちにしてやるわ！」

……それこそがデュエルを楽しむことなのだろう、と佐天は考えたのだった。

「バトル！【アーカナイト・マジシャン】で御坂さんにダイレクトアタック！」

佐天の攻撃宣言に、今まで待機していた【アーカナイト・マジシャン】が杖を振り上げる。

すると杖の先端から3つの魔法陣が現れ、1つの大きな魔法陣に収束したそれを銃口のように美琴へと向ける。

「『アーカナイト・ブラスター・キャノン』！」

そして極大な光の矢が美琴に向けて放たれた。

この攻撃が通れば彼女のライフは0となり、佐天の勝利となる。

【アーカナイト・マジシャン】の攻撃が目の前に迫った瞬間、

「墓地に存在する【超電磁界の守人 キーン】の効果を発動！墓地に存在するこのカードを除外することで、このターン受ける戦闘ダメージを700ポイント減少させる！」

「墓地からっ!?!」

美琴の目の前に【キーン】と瓜二つのエネルギー体が現れ、その場で守りの体勢を取る。

しかし【アーカナイト・マジシャン】の攻撃を前に、その守りはたやすく碎かれ美琴ごと光の奔流にのみ込まれたのだった。

「うあああああっ!!!」

御坂：

LP：3400 700

それでも美琴はライフを僅かに残すことに成功する。

「ターンエンド!」

佐天はそれ以上の追撃をせず、そのままターンを終了した。

佐天：

LP：2500

フィールド：

【アーカナイト・マジシャン】

【魔女の結界】

伏せカード：0枚

手札：2枚

（なんとか、このターンは凌いだ。……でも。）

美琴は自分の場を見る。

フィールドには伏せカードを1枚残すのみで、それ以外は何も残されてはいない。

しかも佐天の【アーカナイト・マジシャン】の効果の前では、下手に壁モンスターを出しても焼け石に水。

状況は美琴にとって絶望的と言えた。

（『あのカード』を引ければ、まだ勝ち目はある！）

……それでも美琴の中の闘士は消えない。むしろここにきて最高潮に達しているとも言えた。

（このドローに……全てをかける！）

「私の……ターン！」

そして美琴の最後のドロー。

「……………」

「……………」

その瞬間、時間が止まったかのように感じられた。

……そして引いたカードを見た美琴は、

「来たっ！」

勝利を確信した。

「手札の【イリス】を墓地に送ることで、私は手札から【超電磁界の射手 イーゼル】を特殊召喚！」

超電磁界の射手 イーゼル

属性：光

レベル：3

攻撃力：500

美琴の場に新しく雷獣の毛皮を着た弓兵が現れた。

「【超電磁界の射手 イーゼル】はこの方法で特殊召喚された時に、

そのレベルを捨てたモンスターのレベル分アップさせる！【イリス】のレベルは2、よって【イーゼル】のレベルは……。」

超電磁界の射手 イーゼル

レベル：3 5

「さらに墓地の【イリス】は自分フィールド上と墓地に雷族モンスターしか存在しない時、墓地から特殊召喚することができる！」

超電磁界の天使 イリス

属性：光

レベル：2 チューナー

攻撃力：700

先ほど墓地へ落とされた【イリス】が再び姿を現す。

これにより美琴の場にはレベル2のチューナーとレベル5のモンスターが揃った。

「レベル5となった【イーゼル】にレベル2の【イリス】をチューニング！」

美琴の宣言と共に宙へと舞い上がる2体のモンスター。

まず【イリス】の手から発せられた電気が自身を包み込んで2つの輪となり、そこに【イーゼル】が入り込んで5つの星となった。

「紡がれし雷が、全てを撃ち抜く金色の矢となる！」

レベル：2 + 5 = 7

やがて巨大な光が美琴のモンスターを包み込む。

「シンクロ召喚！全てを貫け、【超電磁界の砲口 レールガン】！」

超電磁界の砲口 レールガン

属性：光

レベル：7 シンクロ

攻撃力：2500

そして光の柱を振り払い、雷を象った装甲を纏う銃戦士がフィールドに降り立った。

「これが……。」

美琴の2つ名を象徴するエースモンスターの登場に、佐天は表情をさらに陰しくする。

「【レールガン】の効果発動！このカードのシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。」

【レールガン】が持っている銃を佐天の【アーカナイト・マジシャ

ン】に向ける。

「行くわよ！『レベル1、ファイア』！」

そして美琴の号令と共にその銃口からレーザーにも近い弾丸が発射された。

「自分フィールド上の魔法使い族シンクロモンスターがカードの効果によって破壊される時、自分フィールド上の『魔女の結界』を除外することですその破壊を無効とする！」

佐天の場にあつた『魔女の結界』が時空の歪みに吸い込まれると、そこから発生したエネルギーの壁が『レールガン』の銃弾をはじく。

「残念でしたね。『レールガン』の効果で私の『アーカナイト・マジシャン』を破壊することが狙いだっただけでしょうけど、そう簡単にはさせません！……このデュエル、」

美琴の反撃をかわした佐天はほっとしたように笑みを浮かべた。

「私の勝ちよ！『レールガン』のもう一つの効果を発動！」

だが美琴の反撃はまだ終わってはいなかった。

「えっ！？」

美琴のその言葉に思わず驚きの声を漏らす。

「『レールガン』は1ターンに1度、手札の雷族モンスター1体を墓地に送ることで、その攻撃力をターンの終了時まで捨てたモンス

ターの元々の攻撃力の半分アップさせる。」

美琴が手札に残った最後の1枚を墓地に送ると、墓地から靈魂のよ
うなエネルギー体が姿を現し、【レールガン】の持つ銃へと吸収さ
れていった。

超電磁界の合成獣 デイルギリアス

属性：光

レベル：9

攻撃力：2800

「私は手札の【超電磁界の合成獣 デイルギリアス】を墓地に送り、
その攻撃力の半分の数値1400ポイントを【レールガン】に加え
る！」

超電磁界の砲口 レールガン

攻撃力：2500 3900

佐天の【アーカナイト・マジシャン】の攻撃力を上回ったのだった。

「バトル！【レールガン】で佐天さんの【アーカナイト・マジシャ
ン】を攻撃！『レベル4、ディザイア』！」

美琴の攻撃宣言と共に【レールガン】は、今にも爆発しそうなほど
のエネルギーを纏った銃を【アーカナイト・マジシャン】へ向け、
その引き金を引く。

銃口から放たれた強大なエネルギー弾を【アーカナイト・マジシャン】は結界を張ってガードするが、耐えきれず【アーカナイト・マジシャン】の身体が爆発し消滅した。

「うぁ！」

佐天：

LP：2500 2000

佐天のエースモンスターを倒し、ライフを500削った美琴。

そんな彼女の表情を見て、佐天は自分がミスを犯していたことに気付いた。

「その伏せカード……。」

「えっ？」

美琴は佐天が突然なにを言い出したのかわからない。

だが、

「……その伏せカードは破壊しておけば、次のターンで私の勝ちでした。」

そう宣言した佐天の声に、美琴は佐天の『悔しさ』と『すがすがしさ』を感じ取った。

「……悪いけど、これでとどめよ！罨カード発動【シンクロ・オーバリミット】！戦闘によって相手モンスターを破壊したシンクロモンスターは、このターンもう1度戦闘を行う事ができる。」

美琴が最初のターンに伏せ、ずっと温存してきたカードをここで発動する。

「【レールガン】で佐天さんにダイレクトアタック。」

【レールガン】が再度銃を構える。

自身を守る術を失った佐天にはもう、その攻撃を止める手段はない。

「『レベル4、デザインア』！」

そして放たれた弾丸が佐天を貫いたのだった……。

佐天

LP：20000

「佐天さん、はい！」

「えっ？」

美琴と佐天のデュエルが終わり、休憩していた佐天に美琴が缶ジュースを手渡す。

どうやら黒子と初春が気を利かせて買ってきたものらしい。

「あ、ありがとうございます。」

佐天はそれをおずおずとした手つきで受け取り、ふたを開けてジュースを口の中に流し込んだ。

中身はただのサイダーだったが、何故かそれがすごくおいしく感じた。

「……よかったら、またデュエルしてくれる？」

美琴のその言葉に佐天ははっと顔を上げる。

見上げた彼女の笑顔は先ほどまでの楽しそうなものではなく、どこか優しげでそれでいて少し寂しげにも見えた。

「はあ……。」

その表情に思わず見惚れてしまう佐天だったが、

「お・ね・え・さ・ま〜!!」

「ちよっ黒子!」

突然後ろから美琴へ飛びついた黒子によって、すぐに我に返った。

「今回も見事なデュエルでしたの!さ、お疲れでしたら是非この黒子にお任せあれ!この黒子が全てを捧げてお姉さまのお疲れを癒し

てさしあげ……。」「

「やめろつつつてんでしょうがぁ！！」

「がふ！」

そしてお約束のように拳骨1発で沈められる黒子を見ると、

「佐天さん！」

後から戻ってきた初春が佐天に声をかけてくる。

「どうでしたか？御坂さんとのデュエルは。」

そう尋ねる初春だが、その表情には「もう答えはわかっている」と書いている気がした。

佐天は少し微笑むと、まるでゾンビのように纏わりつく黒子を必死にひきはがしている美琴を見る。

（デュエルなんて、と思ってたけど……。）

美琴とデュエルを始めて、楽しそうに自分と戦う美琴を見て……。

結果は負けてしまったが、その時にいつも感じていた『諦め』を今回は感じなかった。

—よかったらまたデュエルしてくれる？

そう尋ねてきた美琴の表情を思い出す。

色々と考えてみたが、結局答えは1つしか思いつかないことに気付く。

「……次は負けませんから、覚悟していてください！」

そう宣言した佐天に、美琴は嬉しそうに笑みを返したのだった。

第5話『楽しいデュエル』（後書き）

よく他の方の小説を読んでいると、

あとがきで面白い次回予告をしていることがあるのですが、

私も次回からやってみようかな？

とか考えていたり考えてなかったりです。

今回は皆さんもおなじみ（？）の『変態さん』を中心にした回をやってみようかと思えます。

それではこれにて……。

感想などお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6131t/>

とある決闘(デュエル)の超電磁砲(レールガン)

2011年11月15日14時09分発行